

静岡県博物館協会

研究紀要

第 28 号

静岡県博物館協会 研究紀要 第28号



平成16年度

静岡県博物館協会

静岡県博物館協会 研究紀要 第28号

災害対策チェックシートの作成を終えて

静岡県博物館協会 災害対策ワーキンググループ

代表 日比野秀男 編(常葉美術館)・2

1、地震対策ワーキンググループのスタンスについて

清水秀男(熱川バナナワニ園)・2

2、災害対策ワーキンググループ感想

荻原美広(奇石博物館)・3

3、災害対策ワーキンググループに参加して

田中之博(MOA美術館)・3

4、災害対策ワーキンググループに参加して

今田徹(浜松市美術館)・4

5、災害対策ワーキンググループ今後の方向性

飯田真(静岡県立美術館)・5

6、災害対策ワーキンググループの感想

友田千恵(NPO文化財を守る会)・5

地震対応 自己診断チェックシート

友田千恵(NPO文化財を守る会)・7

災害における文化財被害の実際と救済活動について 福井・伊豆の文化財被災報告

友田千恵(特定非営利活動法人 NPO文化財を守る会)・11

遠江西・中部地域の中世石塔の出現と展開 静岡県下における中世石塔の研究1

松井一明 太田好治 木村弘之・43(1)

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規定

・44

表紙 鎌田兵衛供養塔(磐田市)

災害対策チェックシートの作成を終えて

静岡県博物館協会 災害対策ワーキンググループ

代表 日比野秀男 編（常葉美術館）

はじめに

静岡県博物館協会に「災害対策ワーキンググループ」が設置されたのは平成15年度である。その間の経緯と平成15年度の活動については、本紀要の前号に掲載してあるのでここでは平成16年度の事業概要をまとめ、さらにワーキンググループとして活動してくれた方々のコメントを付け加えさせていただいた。

平成16年度関連事業

- 1) チェックシートの配布と自主分析 5月 総会 静岡県立美術館
- 2) 講演と質疑応答 9月(静岡県地震防災センター)
- 3) 災害対策講習会(西部) 12月(浜松)
- 4) 災害対策講習会(東部) 平成17年3月(熱海)
- 5) 新潟県中越地震被災博物館現地調査

平成17年1月(新潟県十日町市、長岡市)

1、地震対策ワーキンググループのスタンスについて

清水秀男(熱川バナナワ二園)

県博協で地震対策の話が出た時、私は1978年の伊豆大島近海沖地震を現在の職場で体験した話を引き合いに、被災した美術品のレスキューなどより来館者の安全確保の方が最優先課題だと

力説した。そのせいもあって私もワーキンググループの一員に任命されたのだが、当初、他のメンバーは私共が炊き出しをしたり、非常食を備蓄しているという話を遠い所の話として聞いていたようであった。それが昨年8月旧盆の豪雨で、伊豆が陸の孤島となり、実際にキャンプ場に閉じ込められた人達や、車で身動きの取れなくなった人達を保護したり、非常食を配布したことで、私の体験談が現代にも通用する事を理解していただけたようである。そしてこの10月の中越地震である。この災害では盛んにライフラインの確保という言葉が使われたが、電気、水道、ガス、電話等が復旧しない限り、被災者保護が優先されて美術品等のレスキューは現実的に難しいという事を皆さん認識されたようである。伊豆はこの10月、22号台風の直撃を受け、バス、鉄道は全てストップし、熱海のような交通の要衝に位置するMOA美術館ですら、足止めをくった来館者の対応に追われたという。

このワーキンググループが組織されて2年足らずの間に、我々は想像を絶する自然災害を何度も体験することとなった。その結果、私が提唱した「災害からお客様を守る」というテーマの重要性を委員の皆さんが第一義的に考えて下さるようになり、私のワーキンググループでの仕事は一段落したのかなというのが今の心境である。

2、災害対策ワーキンググループ感想

荻原美広（奇石博物館）

博物館が自然災害に対する備えをどの様に対応するのか。複数の選択肢があり、それらは基本的に資金力と人力に制約された中で対策になるが、そのスタートとして職員の意識がどのようであるかがその後の対応の違いに繋がってゆく。博物館災害対策ワーキンググループに参加したことでこの「災害に対する意識」を啓発されたことが大きな収穫であった。具体的には以下の4項目について強く意識する事になった。

- 1、消極的になる状況を見直す良い機会になった事
- 2、常に災害に対する意識を喚起し続けなければならない事
- 3、身近な出来ることから始めることの大切さ
- 4、博物館相互の応援連携について、どの様なことが可能なのか、障害なのかを探ることが出来た事

1項目については、日々の博物館業務に流されるなかで展示や調査研究、普及事業など博物館として外向けの顔になる事業とは対照的な内向きの活動は後回しにされることが多く、防災対策はその代表的なものである。安全安心が空気のような存在になっている日々の博物館活動の中で、ヒトは自然災害に対して弱い存在であり、故に「備え」という唯一事前に来ることを積極的に行う事が大切であるという事を私自身が再認識し、このメッセージを館員全員へ発信できたこと。また、この認識を周りの館員へ広げてゆくための方策を考えるとともに、いつ発生するか分からない災害には対策意識を維持し続けなければならず、そのためにはどのような館員教育が必要なのかという2項目を強く意識することになった。3項目として、具体的な対応になると直ぐに資金と

いう問題でつまずきストップしてしまう現状の中で、身近に出来ることから始め些細なことでも実行して行こうという動きが始まった。少なくとも動き出したことで館が抱えている災害対策の弱点を認識することが出来た。

更に最も大きい成果は、館が孤立して行う災害対策には限界がある中で館相互の援助協力について端緒が開けたこと。これは各館の災害対策担当者にとっては勇気づけられることと思われる。博物館相互の援助連携については設置主体者の違いや行政法規などにより超えなければならぬ課題もたくさんあるが、話し合いのテーブルが出来たという事は今後へ繋がる大きな成果である。阪神淡路大震災や中越大震災を始めとする近年の天災報道の中でボランティア活動は温かい希望の光であり博物館相互が援助しあえる体制を整えることは重要である。災害が起こったときに、人命・ライフライン・財産が優先される中で文化財に目をとめておく関係者が存在することも必要であると思われる。

3、災害対策ワーキンググループに参加して

田中之博（MOA美術館）

阪神・淡路大震災後、自館ではその教訓を活かした免震装置の導入や収蔵庫内の資料管理、展示備品等の改善などの対策を講じてきた。しかし、ほんとうにこれで大丈夫なのかどうかと不安を感じていた矢先、静岡県立美術館の飯田氏から県博協の災害対策ワーキンググループへの参加のお誘いをいただいた。東海大地震の発生が叫ばれてから久しいが、各博物館園がどのような対策をどのように講じているのかなどの情報を得たかったこともあり、早速参加のお許しをいただくべく連絡をとった。

ワーキンググループでの活動は、主に博物館資料の保全対策、地域に点在する文化財対策を検討することだった。なかでも自館の資料保全の在り方を元にしたチェック表作りは、不安を抱いていた自分にとって内容を見直す好機となり、実際に災害対策資材のメンテナンス不備などを再認識でき、大変有り難かった。また、地域文化財対策では、検討した内容を地元を持ち帰り、はじめて具体的な対応策を地元行政の管轄担当者と話し合うことができ、自館のような私立美術館でも行政とタイアップして地域の文化財対策を共に進める道筋を模索することができたことは有益であった。

全体討議では危機管理や「観測情報」「注意情報」「予知情報」など新しい注意情報への対応、開館時における来館者の安全確保、災害避難民への対応、文化財関係のNPOや団体・企業との連携協力、ボランティアへの対応など様々な諸問題が提起され、その対策はどの博物館も十分とはいえない現状であることを知った。公共施設として文化財を一般に公開している以上、このような災害に対応する義務と責任は重大であることを改めて認識できたことは、美術館運営業務全般にわたって従事する自分にとって大変有意義なことであった。そうした中で起きた昨年の風雨災害や新潟県中越地震は、要求される災害対策の多様さを身近に感じ、ワーキンググループで検討していたことの重要性をまざまざと見せつけられた出来事であった。とまれ一つの館、団体では不可能なことを相互ネットワークを通して共に協力し助け合っただけでなく、今後更に重要かつ意義ある活動となっていくと実感している。

4、災害対策ワーキンググループに参加して

今田 徹（浜松市美術館）

東海地震の発生が叫ばれて長い年月が経った。その間に阪神・淡路大震災、日本海中部地震、新潟県中越地震が起きた。他にも、津波・噴火・台風・火災と自然がもたらす災害に毎年多くの被害が出ていく。博物館施設の防災対策は、現在に至るまで徐々に準備を進めていたわけであるが、やはり充分とはいえないことを今回のワーキングを通じて感じている。災害に対して美術館として思索し準備しなければいけないことは、注意情報での対応、開館時の入館者の安全確保、災害避難民への対応、博物館資料の保全、他機関との連携、ボランティアへの対応と、次々と出てくる。しかし、館運営費の削減により防災対策費に多くの予算を割けない現状により、前向きに対応できない実態とともに、東海地震の想定被害が格段に大きいことによる諦観や地震予知の可能性の高いことによる安心感が、博物館関係者の意識の中に広がっていると感ずることもあった。博物館は、貴重な資料を扱っていることや集客を目的とする施設である。そして、そのことが、内外に東海地震の恐れや施設の地震対策の現状などを公開することの抵抗となっていることも事実であろう。

災害対策ワーキンググループとしての活動は、特に、災害発生からある程度の時間経過した時の想定や災害時に帰宅できない観光客（災害避難民）への対応、災害ボランティアとして館へ訪れる他県の人々への対応など多くの見落としがちな視点から災害対策を検討することができ、大変意義深いものであった。また、この機会を通して博物館にかかわりのある業者の方や愛知県博物館協会の方などと交流することができ、想定範囲が広域な東海地震に対してさらに広い視野で情報交換や活動を広めていく必要性を感じた。

浜松市は、太平洋戦争において壊滅的な被害を受け、多くの人命と文化財を失った。その戦災によって損失したものが、あまりに尊いものであったことを実感している。人命が第一であるのは当然であるが、

後世に残すべき貴重な資料を未来の財産として、残すことの重要性も博物館職員として再認識した。

5、災害対策ワーキンググループ今後の方向性

飯田 真（静岡県立美術館）

2003年に発足した静岡県博物館協会災害対策ワーキンググループ。初年度は、メンバーが来るべき東海地震の確かな情報を得るところから始まった。いろいろなところから最新の情報を得るに従い、きつと近いうちに起こると確信した。少なくとも起こることを前提とした対策を講ずる必要性があると痛感した。そして、2004年、相次ぐ台風被害や新潟県中越地震、年末にはスマトラ沖地震による津波被害など世界的な災害の年となった。次は・・・と気が引き締まる思いがすると同時に、このワーキンググループが何か役に立てるのかという不安も出てきた。

結論から言うと、災害対策に完全なマニュアルなどない。災害の規模や被災の状況は一樣ではないからである。このワーキンググループに基本的マニュアルや指針のようなものを求められても、それは無理である。逆にそういうものに頼ろうとする姿勢は危険ともいえる。

やはり災害対策の基本は「人」である。いろいろなケースに応じ、臨機応変に対応できる判断力が求められるからである。そして「人」と「人」の力が結集されることにより、対策・対応がより効果を発するものになるのである。つまり一人一人が災害に対しての意識を高めることが第一点。その意識をできるだけ共有されたものにするのが第二点であると思う。災害対策講習会がそれを進める機会となれば幸いである。

また、この意味で普段からのネットワークの形成が重要と感じる。

新潟県中越地震の事例からも伺えるが、文化財レスキューの話など、最初は心ある有志の中から単発で起こる。しかし、これを組織化するには、いろいろな問題もあり時間がかかる。組織化してから動くというのでは遅すぎる場合も多い。有志が一人から二人へ、そして複数の組織へと広がりを見せていく中で事が進んでいる。したがって、災害対策ワーキンググループの今後の方向性として、博物館だけではなく、地域の文化に関わる他の機関（大学・文化組織・その他NPOなどボランティア団体）とのネットワークを強化してゆく必要性を感じている。このことは、災害対策のみならず、単なる文化財保護を超えた静岡の文化発展に寄与するものとなるにちがいない。

6、災害対策ワーキンググループの感想

友田千恵（NPO文化財を守る会）

静岡県は、東海大地震の発生が予想されている。県内では様々な地震対策が行われ、一般的にも地震防災に対する関心は高い。一方、文化財への災害対策は、個人や所有施設の管理にゆだねられており、一般的な地震防災対策に比べると、意識や関心は低いのではないかと感じていた。平成14年に、文化財を守る会は、災害から、特に地震災害から文化財を守るための災害対策ネットワークの構築を目指して発足した。今回、静岡県博物館協会の災害対策ワーキンググループに参加させていただくことになった。このような機会で、災害から文化財を守るためのネットワーク作りの必要性を訴えることができたのではないかと考えている。

チェックシートは加盟館園の災害対策が対象であった。これによって、各館が不足の部分や、今後目指すべき対応が見えることになったのではないかと思います。

平成16年は災害が多く続き、文化財への被害も多かった。そのような中で、当会の活動をワーキンググループ内や、また博物館協会の中で発表する機会をいただけてきた。NPO文化財を守る会は、特定非営利活動法人という特殊な形を持って活動している。民でもなく官でもない特殊な枠組みは、文化財を保全する活動を行う上で足が軽く動きやすい。今後は、災害から保全する文化財の対象を、博物館園のものから、民間にまで広げた形でネットワークを組むことができるような形を模索したい。

おわりに

災害対策の研修は終わりのない旅のようなものである。何時来るかも知れず、すぐに来るかもしれない。そうした中で研修を続けて行くことは何か無駄なことをしているのではないかという非難を受けるかもしれない。しかしながら静岡県博物館協会の活動の一つとして多くの人々の関心を得ていることは毎回、多数の参加者がいることが証明してくれる。また、愛知県からの参加者も予想を超えて20名もいたことは災害は一県内だけで済むものではないことを示してもいる。そして、予想もしていなかった大きな災害が各地で勃発し、災害対策ということが迂遠なことではないことを教えてくれた。これからにより一層、広く市民にも知ってもらい、災害対策の重要さとともに博物館施設の重要さを知っていただくことがより一層必要ではなからうか。

おわりに、静岡県博物館協会の事務局の方々には多大なご協力をいただいたことに厚く御礼申し上げます。また、ワーキンググループの方々には忙しい業務の中、積極的に活動に参加して下さり心より御礼申し上げます。

付記

本編は「はじめに」「おわりに」を日比野が執筆し、他の稿はワーキンググループの一部のメンバーから原稿を頂いたものを編集した。

静岡県博物館協会 地震対策ワーキンググループ
地震対応 自己診断チェックシート

3つの項目に分けて、地震への備えや対応へのチェック項目があります。「はい」「いいえ」「わからない」「該当しない」「A」「B」「C」のいずれかにチェックをしながら進んでください。

A：すぐに対応できる、またはすぐに行うことができる

B：予算次第で実行できる

C：館長など上役の決断があれば実行できる

(ア) 災害からお客様を守る

静岡県博物館協会には公立施設の他に多くの民間施設が加盟しています。公立施設の場合は基本的に耐震性に考慮した設計がなされており、建物の安全性は最低限確保されていると言ってよいでしょう。ところが、民間施設の場合、地震災害が発生した場合、真っ先に建物の倒壊、破損が想定される場合が多いのです。これはすなわち、そこに働く従業員は勿論、来館中の観覧客にも生命の危険が及ぶということなのです。

この項では災害発生時にどのような手順で、お客様の安全を確保するか、また怪我人への対応、その後のケア等、サービス業として心がけておかなければならない心得を確認したいと思います。

1.) 非常時への備え	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.従業員に防災教育を施し、定期的に防災訓練を行っていますか。					A・B・C
2.実際に災害が発生した場合の、指示系統、役割分担等を示したマニュアルは整備されていますか。					A・B・C
3.救出・救護等に必要の救急資材、担架等は常備されていますか。					A・B・C
4.飲料水、食料(非常食)、毛布等、災害時に必要な物資は確保されていますか。					A・B・C
5.一般家庭ではラジオを常識的に備えていますか、貴館に非常用のラジオは使える状態で装備されていますか。					A・B・C
2.) 東海地震観測情報、注意情報、予知情報への対応について	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.地震情報は第1段階の観測情報から第2段階の注意情報を経て第3段階の予知情報に至り警戒宣言が発令されます。デパートなどでは第2段階の注意情報が出た時点で閉店する取り決めになっていますが、貴館での対応は決まっていますか。					A・B・C
2.注意情報や予知情報が出た場合、館内放送で来館客に情報提供し、退館を促すこととなりますが、放送原稿などのマニュアルは準備されていますか。					A・B・C
3.県地域防災計画には文化財の倒壊等による人的被害を防ぐ耐震対策の実施が盛り込まれていますが、貴館では展示品等に耐震対策がなされていますか。					A・B・C
4.前記3の設問にはいと答えた方は、具体的にその内容を列記してください。					A・B・C
3.) 災害発生時の来館者対策	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.園館職員が総出で来館客を安全な場所に誘導するのは当然ですが、エレベーター、密室等への閉じ込めに即対応できるようになっていますか。					A・B・C
2.死者などが想定される場合、入館者数と避難客数の数的確認が最優先されるべき課題です。貴館では常に入館者数を把握していますか。					A・B・C
3.停電で館内放送が使えなくなっても来館者への避難、誘導の案内は必要です。拡声器等が使える状態で常備されていますか。					A・B・C

4.自館の場合は当然ですが、二次的に近隣で火災等が発生した場合、貴館は消火活動に協力できますか。					A・B・C
5.救急車が期待できない場合、怪我人を医療施設へ運ぶのは、怪我人の発生した園館の責任です。そのような状況に対応出来る人材や車両が確保できますか。					A・B・C
6.適切な避難誘導が完了した時点で、園館の責任は果たされたと思いますが、僻地施設の場合、避難客のその後の食事の心配までしなければなりません。貴館はそのような必要性を感じますか。					A・B・C
7.前記6の設問にはいと答えた方におたずねします。貴館ではそのような状況を想定して非常食等を常備していますか。					A・B・C

(イ)避難民への対応

(ア)では開館時の入館者の安全確保を考えましたが、災害発生からある程度の時間経過した時や、突発型地震の場合には、博物館園はその公共的な性格から災害避難民が集まることが予想されます。ここでは、入館者の安全確保した後、または、突発型地震発生後の対応について考えてみましょう。各博物館園は設立母体や環境が異なるので、自らの置かれている立場を確認し、館園と職員の行動計画を立てることが必要でしょう。

1.) 災害時における地域と博物館園の連携	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.博物館が所在する地域の防災計画を知っていますか。					A・B・C
2.その防災計画に博物館が位置づけられていますか。					A・B・C
3.博物館の周辺に指定の避難所がありますか。					A・B・C
4.病院関係者が、救急施設をその避難所で開設しますか。					A・B・C
5.災害時に博物館は応急対策機関または施設に指定されていますか。					A・B・C
6.発生時に博物館を避難場所とする可能性がありますか。					A・B・C
2.) 被災者への博物館園の対応	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.閉館時に災害が発生した場合、または突発性地震が発生した時に博物館が行う事務分掌が決められていますか。(複数回答可)					A・B・C 利用者の避難誘導・被災者の保護・施設の保全 資料の保全・応急復旧対策・その他
2.閉館時または突発性地震が起きた時に職員またはそれに相当する人が博物館の災害対策に対応するように決められていますか。					A・B・C
3.公立館にお聞きします。災害時対応マニュアルで職員が博物館から離れて自治体の規定などで行動するように定められている場合、博物館園の管理(二次災害・盗難防備など)を決めていますか。					A・B・C
4.博物館の災害対策に避難民への対応が含まれていますか。					A・B・C
5.もし、博物館が避難場所になるとすれば、予想される避難民はどのような人たちですか。(複数回答可)					博物館見学者・観光客・一般住民・その他
3.) 災害時に於ける博物館園の相互応援態勢	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.災害発生時に博物館では他機関との相互応援体制を決めていますか。					A・B・C
2.その対象は博物館ですか。(設問1が「はい」の場合) その対象は県内ですか。					A・B・C
3.相互応援態勢を計っている博物館に伺います。協定書または、それに類するものを締結していますか。					A・B・C

4.博物館で相互応援態勢を整えた場合、その中に災害避難民への対応を含めるべきだと考えますか。					A・B・C
5.災害発生時に所在地の行政機関と被害状況を確認するシステムがありますか。					A・B・C

(ウ) 博物館資料の保全

博物館の収蔵資料を、地震などの緊急災害から守るためには、日常からの備えが必要です。組織やマニュアル作り、管理態勢作りなどのソフト面と、施設や設備、備品のメンテナンスや調達などのハード面、両面から総合的に対策をとっておくことが必要です。

自館の特性に合わせて、必要か否かを検討しながらチェックを進めてください。

1.) マニュアル、組織について	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.資料に対する緊急災害時対応マニュアルはありますか。					A・B・C
2.緊急災害時の組織表はありますか。また、その中には資料保全担当が割り当てられていますか。					A・B・C
3.資料保全を目的とした定期的な防災訓練はおこなっていますか。					A・B・C
4.資料所在簿は定期的にメンテナンスされていますか。					A・B・C
5.資料救助の際の優先順位リストはありますか。					A・B・C
2.) 施設の管理について	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.漏電のチェックは定期的に行っていますか。					A・B・C
2.建物の歪みによって扉が開かなくなることも考えられます。その場合の対策と用意はありますか。					A・B・C
3.よって温湿度管理が行えなくなることが考えられます。その場合の対策は講じられていますか。					A・B・C
4.日常の管理として、定期的な保管庫の状態確認を行っていますか。					A・B・C
5.日常の管理として、定期的な展示室の状態確認を行っていますか。					A・B・C
3.) 被害に備えて	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.証明器具などの落下による二次災害への対応は考えられていますか					A・B・C
2.漏水・漏電等による二次災害への対応処置は考えられていますか					A・B・C
3.災害時の盗難防止対策は講じられていますか					A・B・C
4.収納棚や収納具の転倒防止対策はできていますか					A・B・C
5.資料は、梱包または保存箱に入れて収納していますか					A・B・C
6.収納棚には、資料の落下防止のために、前面ストッパー等を取り付けていますか。					A・B・C
7.引き出し型の収納棚には、飛び出し防止のロックがありますか。また、習慣的にロックをかけていますか。					A・B・C
8.絵画ラックには、飛び出し防止のロックがありますか。また、習慣的にロックをかけていますか。					A・B・C
9.絵画ラックには、落下防止対策に適切な吊り金具を使用していますか。					A・B・C

10.展示ケースの転倒防止策は行っていますか。					A・B・C
11.展示には、落下防止対策に適切な吊り金具を使用していますか。					A・B・C
12.窓・展示ケース等のガラスには飛散防止フィルムが貼られていますか。					A・B・C
13.自立掲示板への転倒防止対策はできていますか					A・B・C
14.資料自体の転倒防止対策はできていますか					A・B・C
15.展示ケース内には、湿度調整水など二次的被害をもたらすものをおいていませんか。					A・B・C
4.) 資材について	はい	いいえ	わからない	該当しない	チェック
1.防災備品を設置していますか。					
2.前記1の設問にはいと答えた方へ。その設置場所については、職員が周知していますか					
3.前記1の設問にはいと答えた方へ。備品の定期的なメンテナンスは行っていますか。					
4.収蔵資料に応じた救済資材を用意していますか					
5.災害後の記録作業に必要なカメラ、フィルム、筆記用具は用意してありますか					

災害における文化財被害の実際と救済活動について

福井・伊豆の文化財被災報告

特定非営利活動法人 NPO文化財を守る会 友田 千恵

はじめに

平成16年は、非常に災害の多い年であった。気象庁の発表によると、平成16年は台風の上陸数が10個と、気象庁観測至上過去最多を記録した。集中豪雨の回数も無人雨量観測網が稼動した1976年以来で、最多となっているそうだ。滝のように激しい雨という定義の、「1時間の降水量50ミリ以上」が全国で延べ468回、大雨警報にあたる「1日あたりの降水量200ミリ以上」が463回、そのうち「1日あたりの降水量400ミリ以上」が30回だったという発表があった。これによって各地では多くの被害が出て、未だにその爪痕を大きく残している。

また、平成16年10月23日に、新潟県中越地方でM6.8の地震が発生した。そして、その後も震度6強を越える余震が2度立て続けに起き、大きな被害をもたらした。被災地の様子や被害の状況はテレビやラジオで現在も毎日放送されていて、日本中が心配と応援の気持ちを向けている。

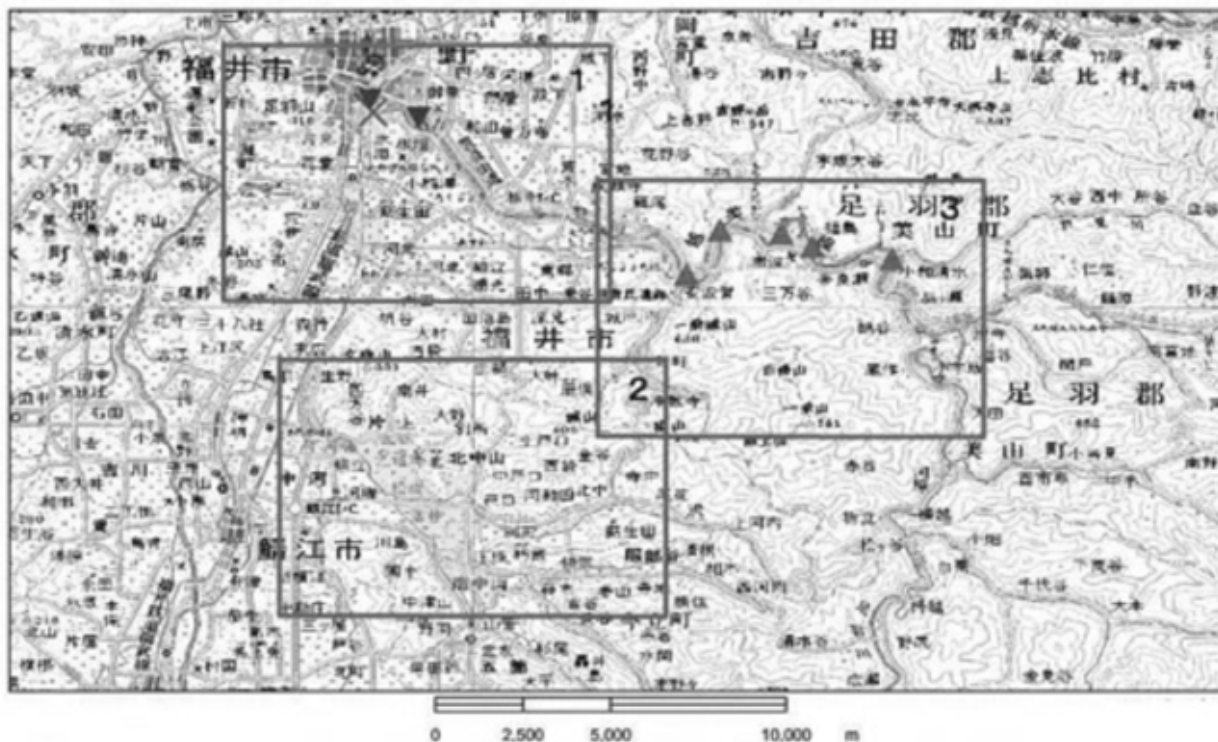
1. 福井豪雨（平成16年7月18日）

18日朝から昼にかけて、山間部を中心に1時間に100ミリ近くの集中的な大雨が降った。それは大変記録的な豪雨で、雨が強くなりだしてからほんの数時間たらずで、河川は決壊し、鉄橋は流出、山間部の各地で土砂崩れが起った。

文化財も多数被害をうけた。特に大きな被害を受けたのは、特別史跡名勝一乗谷朝倉氏遺跡及び福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、福井県埋蔵文化財調査センターである。NPO文化財を守る会では、会員2名で福井豪雨から1週間後の24日に、現地入りした。1日目は、市街地で最も被害の大きかった春日地区、木田地区を回り、2日目には、一乗谷朝倉氏遺跡、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、福井県埋蔵文化財調査センター、一乗谷史跡公園センターと、その上流付近を回った。

大きな被害は河川に添って起きていた。山間部で大量に降った雨は、土砂崩れを伴って山を下った。河川へ流入すると、上流から下流に向けて蛇行する川を曲がりきれなかったとでもいうように、各所で越水がおこっていた。被害は足羽川流域で特に多く、堤防が決壊したり越水して、市街地や住宅地は広範囲で浸水の被害にあった。また、足羽川にかかる越美北線の鉄橋が流出するという大きな被害も起きた。

私たちが現地入りした豪雨から1週間後は、まだまだ路肩に泥が多く溜まり、被害の跡が大きく残っていた。市内は交通規制が解除されて、車が通れるようになっていたが、水を撒いて道路を清掃する清掃車がゆっくりと走っていて、あちこちで渋滞が起きていた。住宅街では、家の中の土砂の除去作業が続いており、たくさんの泥にまみれた「ミミ」が道路に出されていた。



(図1) 平成16年福井豪雨による冠水区域図(福井、鯖江、美山地域)(国土地理院HPより)

1 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、福井県埋蔵文化財調査センター

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と福井県埋蔵文化財調査センターは、足羽川の川縁近くに並んで立地している。すぐ近くにかかる鉄橋は、上流から流れてきた雨と土砂と流木などによって、押し流されて、その勢いはそのまま川のすぐ裏手にあった埋蔵文化財調査センターを直撃した。

遺跡資料館では、埋蔵センターの陰になっていたため、土砂の直撃は幸いにも免れた。しかし、館内全体が浸水し土砂が数センチ堆積した。展示室は、学芸員の判断で浸水前にシャッターを下ろしたため、展示室内への土砂の浸入は他所に比べると少なくなりました。また、所有する資料や借用資料などは2階の収蔵庫に保管してあったため、無事であった。

一方、まさに川縁に面していた埋蔵文化財調査センターは、大変に大きな被害を受けた。足羽川が決壊して流れ出た大量の雨は、土砂や石、流木をともなって、埋蔵文化財調査センターのトラックヤードのシャッターを直撃した。シャッターは突き破られて、館内には大量の泥水と土砂が流入した。その勢いは大変に強く、館内には大量の泥水と土砂が流入した。その勢いは大変に強く、館内のドアや壁も突き破られており、1階部分はほぼ全体土砂にまみれた形になった。1階にあった収蔵庫にも泥水と土砂は流入した。棚に置かれていた発掘遺物も泥水や土砂をかぶり、散乱して大きな被害がでた。水が引いた後には、館内には床上70センチほどまでに土砂が堆積したところもあった程で、遺物類は土砂にまみれて散乱していたという話であった。

私たちが訪れた時は水害から一週間経っており、館内の土砂除去作業は済んでおり、館内の泥のふき取り作業や、泥をかぶった書類や事務用品などを流水で洗う作業が行われていた。収蔵庫内の土砂の撤去も済んでおり、遺物類は、土砂の中から取りだして、

その他のゴミと選り分けて、コンテナにつめる、という一時的な形で保管されている状態であった。

災害にあつてから、館内の復旧作業を進めていく過程を以下に簡単にまとめてみた。

A「館内の土砂の除去、備品類や館内の清掃など、体力があれば誰でもできる作業」

福井では、災害復旧のために、県外から多数のボランティアが駆け付けた。ボランティアの受け入れ先は個人もあり団体もあり様々であったと思うが、被害にあつた市内の各所にはボランティアセンターができていた。そしてボランティア希望の人は、センターに行くこと、必要とされている地域に振り分けられて、シャトルバスによってその地域に派遣されるという形になっていた。災害直後は、一般民家などへ、ボランティアが多く投入されたが、災害後5日目くらいから落ちてきてきたため、埋蔵文化財センターへも多くのボランティアがまわるようになった。そして、その一般ボランティアの方々の協力によって、館内の土砂を除去することができた、ということであった。

B「収蔵庫の土砂除去や遺物類の救出など、専門的な経験が必要な作業」

館の職員や発掘調査員、県内の学芸員などが多数手伝いに来て、収蔵庫の土砂除去作業と平行して、土砂の中から遺物類を取り出して、コンテナに並べていく作業をおこなった。今後は、一応救出した遺物類を、一つずつ特定して整理し直す作業をしなければならぬ。

大変な数の遺物が土砂に埋もれてしまったために、この先の復旧作業は大変な時間がかかるものであると思われるが、館の職員



(写真3) シャッターが破られて館内に土砂が流入した
(福井県埋蔵文化財調査センター内)



(写真1) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館・
福井県埋蔵文化財調査センター外観



(写真4) 泥のついた備品や書類などを洗っている
(福井県埋蔵文化財調査センター)



(写真2) 収蔵庫内の様子
(福井県埋蔵文化財調査センター内)

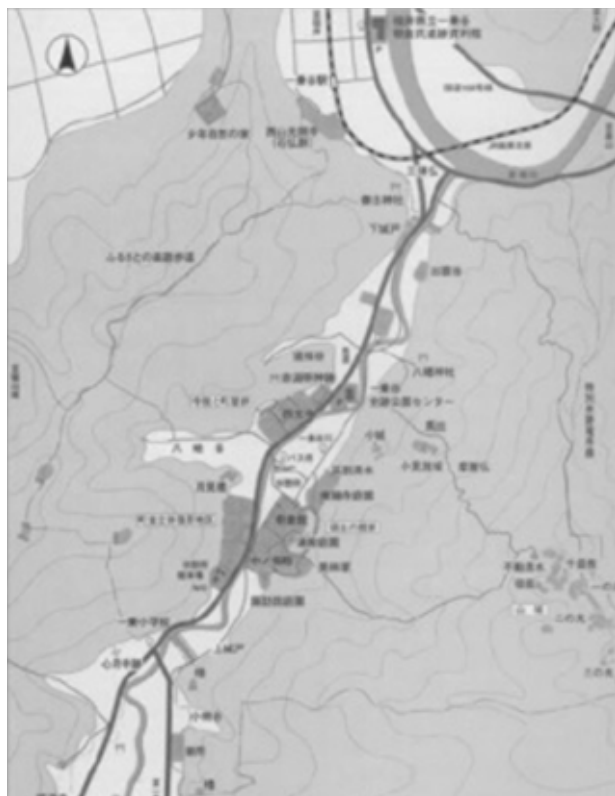
と発掘調査員などで進めていく予定ということであった。

2 一乗谷朝倉氏遺跡、一乗谷史跡公園センター

一乗谷朝倉氏遺跡の被害は、豪雨により水量が増加した一乗谷川の水が、大きく蛇行する地点を曲がりきれずに、川岸の石積をえぐるようにして溢れ出たことよって起こった。整備地8ヘクタールの内、4分の1が被害にあり、遺跡内の武家屋敷、町屋、寺院跡、園路などに平均30センチの土砂が堆積した。また、中ノ御殿と諏訪館庭園の間を流れる沢も崩壊し、両地の一部に土石流が流れ込んだ。遺跡周辺では、10箇所以上で崖崩れが起こっており、朝倉館背後の斜面では、高さ5メートル幅15メートルに及んで崩れていた。しかしながら、遺構の流出などの損害はなく、唐門、朝倉館跡や湯殿庭園跡なども無事だった。遺跡を管理する一乗谷史跡公園センターでは事務所一帯が浸水し、30センチほどの土砂が堆積した。

この辺り一帯は史跡があるだけでなく、民家が多数点在し、史跡と住民とが共存する地域である。周りの民家も、1階部分が土砂で流されて、柱だけになっていたりと大変な被害の状態であった。一乗谷史跡公園センターは県の施設であったため、センターの職員は、住民の復旧を第一に考えて行動した。一乗谷史跡公園センター所長の橋本さんに伺ったお話の一部を抜粋する。

「被害にあった次の日から、どんどん一般のボランティアが入ってきて、民家の復旧を手伝いに来てくれるんですが、その人は、うちに『何をしたらいいでしょう』とくるわけです。それをほっておくわけにも行きませんし、その対応で追われてしまします。ボランティア対応のマニュアルがあるわけでもなく、トイレも水道も電気もなく、その場にいる誰も、何をしたらいいか、どう指示をしたらいいのか、わからなくなってしまつんです。中



(図2) 一乗谷地区
(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館HPより)



(写真5) 川の石積が崩れて雨水が氾濫した。
両岸には遺跡が広がる。(一乗谷朝倉氏遺跡)



(写真6) 土砂の流れた道。この手前には遺跡が広がる
(一乗谷朝倉氏遺跡)

には長靴も軍手もスコップも持たずにボランティアさせてくれ、と来る人もいます。そういう人達には事前に、ボランティアになるためのマニュアルが必要ですし、現場にいる人間には、その対応のマニュアルが必要なんです。また、ボランティアが来るということは、ライフラインが整っていないといけないということですね。せめて水とトイレがなければ、どうしようもありません。災害が起こったあと、まず第一に、何を整えたらいいのか、ということも事前に把握しておく必要があります。こちらでは、とにかくトイレは作らなければと、修繕費の中で仮設のトイレを用意しました。復旧の予算はすぐにはおりませんので、待っていたら間に合いません。」

このトイレについては、民家に来るボランティアのためだけでなく、周辺住民のためのものでもあった。「水が通らないが」「電気はまだなのか」というようなことの問い合わせも近隣住民からあり、遺跡の被害への対応は後回しになることが多かったようである。

このようなことは、施設によって色々と思うられるが、災害からのスムーズな復旧を行うために、自館がどのような形で復旧を行うのか、外部からのボランティアや近隣住民の問題もありえると仮定してシミュレーションしてみる必要がある。

2. 台風22号（平成16年10月9日）

10月9日午後4時ごろ、台風22号は伊豆半島に上陸した。石廊崎で午後3時すぎに最大瞬間風速67・6メートルを記録するなど大変勢力が強く、上陸時の中心気圧は約950ヘクトパスカルであった。気象庁は「東日本に上陸した台風でも最大級の勢力だったとみられる」としている。

さて、テレビやラジオのニュースでも伝えられたように、伊東

市宇佐美地区と伊豆市修善寺に大きな被害は集中した。伊東市宇佐美地区では多くの民家の屋根が強風により飛ばされ、伊豆市修善寺では、桂川の氾濫により旅館街が被害を受け、特に建物が国の有形文化財に指定されている新井旅館の被害は大きく、多くのテレビニュースなどで取り上げられた。

文化財を守る会では、8日後の10月17日に現地入りし、宇佐美地区と修善寺を回り調査を実施した。また、翌週の24日には、新井旅館からの要請を受け、会員と学生ボランティア7名を派遣し、館内に残る土砂の撤去作業に加わった。

1 新井旅館 被害調査（平成16年10月17日）

新井旅館は、多くの文人、画人が宿泊し、文壇や画壇の歴史とつながりの深い旅館で、国の登録有形文化財である。建物は、天城の山から流れ下る桂川のすぐ川べりに建てられている。川面を臨んで掃き出しの窓が並び、川から庭に水を引き込むなど、自然を取り入れた旅館のつくりになっている。旅館のすぐ脇には、桂川にかかる橋がある。この橋は、川底に対して低く架かっており、ちょうど旅館1階の中ばあたりの高さにあった。大量に降った雨は、桂川に集まり一気に流れくだった。そして、一緒に流れてきた流木や石がこの橋に引っかかってダムのようになってしまう、あふれ出た水と土砂が一気に新井旅館1階の窓を突き破って、旅館内に流れ込んだ。これによって、1階部分は全てが泥水と土砂に覆われてしまった。

当会がはじめに調査に入ったのは、台風から8日後の10月17日であった。館内には、まだ土砂が残り、多いところでは、床上60cmの高さまで土砂が溜まっていた。館内は湿気と土砂などによって異臭が漂っていた。木造の建物であるから、除去作業を早く進めなければ、腐敗が進んでしまう恐れがあった。

さて、福井豪雨の1週間後に現地を訪れた時には、自衛隊が入っているような甚大な被害の地域を除いては、復旧作業がかなり進んでいるという印象を受けた。大きな浸水被害にあった埋蔵文化財センターはもちろん、その近隣の民家なども土砂の除去作業はかなり進んでいた。台風から8日後の新井旅館を訪れたときに、未だ床上60センチもの泥が残っているのを見て、作業の遅さに驚いた。早く復旧を果たすためには、このような土砂の除去作業などを行う働き手の存在が欠かせない。復旧作業は、被災者だけで行うのではなかなか進まないため、ボランティアとして、復旧を手助けに来てくれる人達はとても大切な存在である。福井では、民間組織だけでなく行政側も窓口となってボランティアを募っていて、被災した各所に送り出していたが、伊豆市ではそのような動きはなかった。それは、福井の場合とは違って、被害地域が狭い一部に限られていたということがあるのではないかと思われる。また、新井旅館が民間企業であること、復旧がすなわち営業に繋がるという事実も理由であったかもしれない。

2 新井旅館 土砂除去作業ボランティア（平成16年10月24日）

新井旅館は国の登録有形文化財であるが、登録有形文化財とは制度上の規制が厳しくないかわりに、このような災害時でも、行政からの補助があるわけではない。よって、所有者や一般のそれを大事に思う人間の自助努力によって、復旧作業は進めていかなければならない。広範囲に渡る甚大な被害だけが災害ではなく、国の指定文化財だけが守るべき文化財というわけではない、という考えに立ち、このような時にこそ、NPO文化財を守る会は、文化財への保全活動をすべきだということになった。そして、調査から1週間後、館内の土砂除去ボランティアに7名を派遣することになった。



(写真9) 左手の桂川から館内へと水が浸入した
(新井旅館10月17日)



(写真7) 玄関前（新井旅館10月17日）



(写真10) 床板を外し、床下の土砂を除去する
(新井旅館10月17日)



(写真8) 旅館内には土砂が残る（新井旅館10月17日）



(写真11) バケツリレーによる土砂の除去
(新井旅館10月17日)



(写真12) 庭の土砂の除去作業 (新井旅館10月17日)

調査から1週間経ち、床上に60センチから1メートル程の土砂が堆積した館内は、ほぼすべての土砂除去が完了していた。そして残すは床下と庭部分であった。当日は、県外からの有志ボランティア5名と、三島青年会議所からのボランティア10名が加わっており、新井旅館の従業員の方とともに、床下、庭の土砂除去作業を行った。床下をめくると、その下はすっかり土砂が溜まっていた。床板を全面剥がし、スコップで少しずつ取り除く。取り除いた土砂はバケツリレーと、一輪車によって、また桂川に戻した。一日を終えて、大部分の床下と庭の土砂を除去し終えた。

3. どのようにして文化財を守るか

活動を通しての将来への展望

さて、土砂除去作業は普段体を動かさし慣れない人間にとっては、なかなか大変な作業であった。そして、このボランティアによる

土砂除去作業を行う中で、災害地においての復旧活動には2つの種類があるということも思った。ひとつは、今回の土砂の除去作業のようなとにかく現場の復旧をし、もとの生活を取り戻すための「生活復旧作業」である。そしてふたつめは、文化財そのものに対する「専門的復旧作業」、いわゆる文化財レスキューである。新井旅館の場合は、館内の土砂の除去作業は、日々の生活を取り戻すための「生活復旧作業」であった。そして、土砂除去の終わった建物への保存処置や、その他の資料についての復旧作業をおこなうことが「専門的復旧作業」であった。作品や資料の形状や重要性、災害の種類、所有者の希望などによって、「生活復旧作業」と「専門的復旧作業」の着手具合は違ってくると思われる。どちらの作業も同じように重要なことである。そして、災害を受けた文化財を守るためには、「生活復旧作業」と「専門的復旧作業」を同時に復旧を行っていくことが、大切である。

災害がおこった後、一番に大切なものは、人命である。そして、元のような毎日に戻すために、生活基盤を復旧していくことがまず第一に求められる。文化財の復旧活動に入るのは、生活基盤の復旧がある程度見えてきてから、ということになってしまうのだと今回の活動を通して痛感した。

福井の埋蔵文化財センターなど、ある程度一般の住民との繋がりの少ない施設にある文化財は、館の職員が災害直後から動くことができるため、復旧は早く進む。しかし、新井旅館のような民間所有のものや、一乗谷史跡公園センターのように、地域住民に近いところにあるような文化財は、復旧作業が遅くなる。所有者自身や、地域住民の生活基盤が整ってきてからでなければ、文化財の復旧にかかりにくいからである。

新潟県中越地震や阪神大震災での文化財のレスキュー活動においても、民間所有の文化財は、所有者の復旧への希望がなければ

「まともな生活も送れていないのに、なんで先に文化財のレスキューなんだ」と思われ、活動が進まないこともあったようだ。近所の住民もそういう考えでいることが多く、所有者がその目を気にして、「文化財のレスキューなんて、まだいいです。先に生活の復旧をお願いします。」ということもあったと聞く。また、壊れた家財などを整理したり捨てるのとともに、民間所有の文化財は捨てられていくことも多かった。

文化財も人の命と同じで、状態によってはすぐに対応すれば致命傷にならずに済むものがある。割れたり、バラバラに壊れてしまったものでも、捨てることさえしなければ、またいつか元の形に戻すことができる。素人では、建物の木くずなのか仏像の部材なのかわからなくても、専門家が見れば一目でわかる。気づかずに捨ててしまうことはない。よって、生活の復旧と同時進行で文化財の復旧も行っていくことが、致命傷になることや捨てられることを避ける手段である。

おわりに

地域の歴史を語る文化財を守るためには、「生活復旧作業」と「専門的復旧作業」の両車輪で進まなければならないと多くの人に理解してもらうことが必要だと感じる。その理解があつてこそ、文化財への災害復旧対応の活動をスムーズに行うことができるのだと実感した。

文化財は、人間で言うところのDNAによく例えられる。無数のDNAが人間の基礎情報を持って、人間を構成しているように、文化財は人間の築いてきた文化の基礎情報を持って各地に存在し、日本文化全体を構成している。文化財を網羅して包括的に保存し

守って行くことによってはじめて、日本の文化の全体像が浮かび上がってくることになる。

どこまでを文化財とするのか、その線引きは難しいものである。災害時にあつては、なお難しいと思われる。しかし、総括的に守っていくことを第一に考えて、文化財の災害復旧活動を行うべきである。

参考資料

気象庁HPトピックス

「平成17年1月4日 2004年（平成16年）の天候」

国土地理院HP防災関連情報

「平成16年福井豪雨による冠水区域図」

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館HP「遺跡の歩き方」

産砂岩とは明らかに異なる石材で造られている。石材の具合から見ると東三河産砂岩に類似するが、東三河には類似の石材で造られた製品としては渥美半島の東観音寺で宝篋印塔の笠部分が確認できたのみである。よって、これらの関西型式の砂岩製宝篋印塔については東三河産の可能性も指摘できるが、さらに伊勢湾をはさんで伊勢地域との関係についても探索すべきであろう。

このように、遠江西・中部地域の初現期中世石塔を見てみると、荘園や宿場と寺院、国府・守護所などの政治的・経済的求心力をもつ場所や、宗教的な求心力を保つための仏教儀式を行った故事来歴のある場所に関係して分布していること、さらに遠江での石塔の出現時期は鎌倉末～南北朝期に主体があることを明らかにできた。この時期は鎌倉幕府が崩壊過程を歩み南北朝期を迎える動乱の時期であり、中央の支配が揺らいだため自己の力でしのがらうとする在地の武家集団と仏教集団が、地域の支配と物資流通の安定化を図るために精神的結合の儀式に利用したシンボルが出現期の石塔であったとも考えられる。

今後は東遠江～駿河の出現期の石塔の資料化を図ることにより、緑色凝灰岩（当目石）製や安山岩（伊豆石）製の石塔を造った石工やそれを支配していた政治・宗教集団について明らかにしていきたいと思う。最後に、遠江中世石塔研究会のメンバーより日ごろから多数のご教示とご協力、石塔の実測に関しては森町教育委員会の広川達麻氏や各寺院関係者のご便宜とご配慮を頂きました。さらには、浜北市教育委員会鈴木京太郎、湖西市教育委員会後藤健一、豊田町教育委員会清水尚、磐田市埋蔵文化財センター安藤寛、森町教育委員会北島恵介、掛川市教育委員会戸塚和美、浜岡町教育委員会村本薫、藤枝市郷土博物館椿原靖弘、静岡市教育委員会山本宏司、菰山町教育委員会池谷初恵・山田康雄、名古屋市見晴台考古資料館野沢則幸の各氏には該当・隣接地の石塔の実見にご協力、ご教示を頂きました。この場を借りて各氏・各寺院関係者に深くお礼申し上げます。

（松井）

所属 松井 = 袋井市教育委員会 太田 = 浜松市博物館 木村 = 掛川市教育委員会

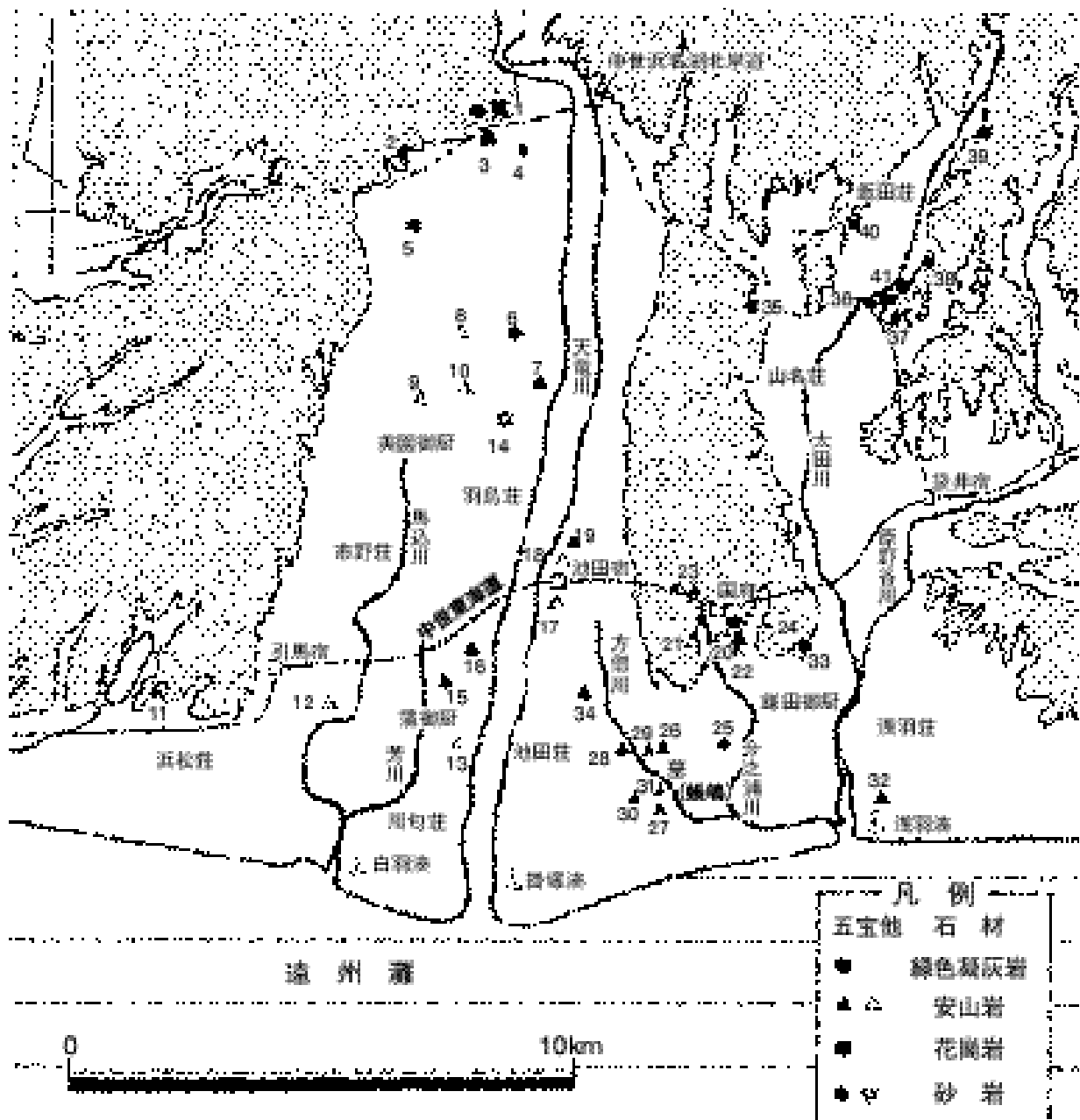
【 参考文献 】

- 太田好治 2001 「浜松市域遠州灘沿岸部における地形変化と遺跡の分布」
『浜松市博物館報』第14号 浜松市博物館
- 加藤恵子 1993 「(5)石塔」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市教育委員会
- 加藤恵子 1997 「石塔の変遷」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
- 桃崎祐輔 2000 「横地城周辺における中世石造物の展開とその意義」
『横地城総合調査報告書資料編』菊川町教育委員会
- 河合 修 2004 「中世の石塔」『焼津市史資料編1 考古』焼津市
- 清水 尚 1998 「行興寺宝篋印塔」『豊田町誌資料集、原始・古代・中世編考古』豊田町
第4 図34・35の出典文献
- 谷岡武雄 1966 「天竜川下流域における松尾社領池田荘の歴史地理学的研究」『史林』49 - 2
- 戸塚和美 2004 「旧観音寺石塔」『掛川市史資料編古代・中世』掛川市
- 鳥居正俊 2001 「浜松市域における中世の石塔」『浜松市博物館報』第14号 浜松市博物館
第2 図16・第3 図22～24の出典文献
- 本間岳人 1998 「遠江における石製塔婆の様相」『立正考古』第37号 立正大学考古学研究会
第4 図36・42の出典文献
- 松井一明・木村弘之 2004 「浜北市内にのこる中世の石塔」
『浜北市史資料編原始・古代・中世』浜北市 第1 図1～第2 図15の出典文献
- 馬淵和雄 2004 「叡尊・忍性教団の考古学」『日本の名僧10 叡尊・忍性』吉川弘文社
- 浜松市石造文化財調査会 2001 『浜松市石造文化財所在目録』
- 浜岡町教育委員会 2000 『目でみる浜岡の文化財』

第1表 西・中遠江古式石塔一覧表

No.	寺院・墓地名	所在地	石塔の内容	備考
1	岩水寺墓地	浜北市根堅	緑色凝灰岩五輪塔 1、花崗岩五輪塔 1	岩水寺関連
2	大屋敷中世墓	浜北市宮口	緑色凝灰岩五輪塔 1	岩水寺関連
3	安泰寺墓地	浜北市根堅	花崗岩五輪塔 1	岩水寺関連
4	西光院墓地	浜北市於呂	緑色凝灰岩五輪塔 1	岩水寺関連
5	報恩寺墓地	浜北市宮口	緑色凝灰岩五輪塔 3	岩水寺関連
6	竜守院跡	浜北市上善地	緑色凝灰岩五輪塔 1	岩水寺関連？
7	学園寺墓地	浜北市高園	緑色凝灰岩五輪塔 3	岩水寺関連？
8	自徳院墓地	浜北市小林	安山岩 A 多層塔 1	美園御厨関連
9	安楽寺墓地	浜北市中条	安山岩 A 宝篋印塔 1	美園御厨関連
10	西隠寺墓地	浜北市寺島	安山岩 A 宝篋印塔 1	美園御厨関連
11	龍雲寺墓地	浜松市入野町	安山岩 A 五輪塔 1	康仁親王墓
12	龍禅寺墓地	浜松市龍禅寺町	安山岩 A 五輪塔 5	引馬宿関連
13	本光寺墓地	浜松市東町	安山岩 A 宝篋印塔 2、安山岩 B 宝篋印塔 1、安山岩 C 宝篋印塔 1	掛塚湊関連
14	かなきんさま	浜松市豊町	砂岩宝篋印塔 1	羽鳥荘関連
15	西伝寺法然塚	浜松市西伝寺町	安山岩 A 五輪塔 3、安山岩 B 五輪塔 2	蒲御厨関連
16	妙恩寺墓地	浜松市天竜川町	安山岩 A 一石五輪塔 1 (江戸)	
17	妙法寺墓地	豊田町池田	安山岩 A 宝篋印塔 1、安山岩 B 宝篋印塔 2	池田宿関連
18	行興寺熊野墓	豊田町池田	安山岩 A 宝篋印塔 1、安山岩 B 宝篋印塔 1、安山岩 C 宝篋印塔 1	池田宿関連
19	西伝寺跡墓地	豊田町池田	安山岩 B 五輪塔 1	池田宿関連
20	見性寺墓地	磐田市見付	安山岩 A 五輪塔 1、安山岩 B 五輪塔 1	見付宿関連
21	西光寺	磐田市見付	安山岩 A 宝塔 1	見付宿関連
22	慶岩寺墓地	磐田市見付	安山岩 A 五輪塔 1、安山岩 A 宝篋印塔 1、安山岩 B 宝篋印塔 1	見付宿関連
23	一の谷中世墓	磐田市見付	安山岩 B 五輪塔 4、安山岩 C 宝篋印塔 1	見付宿関連
24	福王寺今川墓	磐田市城之崎	安山岩 A 五輪塔 2、安山岩 C 五輪塔 1	見付宿関連
25	十輪寺墓地	磐田市上大ノ郷	緑色凝灰岩五輪塔 1	池田荘関連
26	千手寺墓地	磐田市小島	安山岩 B 五輪塔 1	池田荘関連
27	西法寺跡墓地	磐田市小島	安山岩 A 五輪塔 1	池田荘関連
28	正眼寺墓地	磐田市小島	安山岩 B 五輪塔 1	池田荘関連
29	心光寺地蔵堂	磐田市長須賀	安山岩 B 五輪塔 1	池田荘関連
30	法幢寺跡墓地	磐田市小島	安山岩 B 五輪塔 1、安山岩 C 五輪塔 1	池田荘関連
31	心月寺墓地	竜洋町海老島	安山岩 B 五輪塔 2	池田荘関連
32	万福寺墓地	浅羽町湊	安山岩 A 五輪塔 1	浅羽湊関連
33	鎌田兵衛供養塔	磐田市鎌田	緑色凝灰岩五輪塔 3	萬福寺
34	定光寺墓地	磐田市前野	安山岩 A 五輪塔 2(江戸)、安山岩 A 一石五輪塔 2(江戸)	
35	源朝長供養塔	袋井市三川	緑色凝灰岩五輪塔 3	積雲院
36	橋逸勢供養塔	袋井市上山梨	緑色凝灰岩五輪塔 2、砂岩五輪塔 1	原位置不祥
37	西楽寺墓地	袋井市春岡	砂岩五輪塔 3	
38	崇信寺墓地	森町飯田	緑色凝灰岩五輪塔 3	付近墓地
39	宝太寺墓地	森町向天方	緑色凝灰岩五輪塔 1	
40	高屋敷	森町円田	緑色凝灰岩五輪塔 1	
41	本立寺墓地	森町市場	砂岩五輪塔 3	

(数量は推定個体数、Noは第1回番号と一致する。)



第9図 西・中遠江古式石塔分布図 (数字は第1表No.と一致する)

印塔について少し触れておきたい。岩水寺の花崗岩製五輪塔については地輪の下端がコンクリートで固められているため確実なところはわからないが、梵字の位置から見ると低い地輪であると推測される。水輪も縦長傾向があり、火輪の反りは大きいものの、緑色凝灰岩や安山岩製五輪塔とは明らかに異なる古い形態をもつと見られる。産地も15世紀代の岡崎産の花崗岩製石塔と比較すると、結晶の発達具合が岡崎産のものは小さく岩水寺五輪塔は大きく観察できるため、肉眼でも異なる花崗岩で製作されていることがわかる。隣接県では確認できない石材の石塔であるので、14世紀以前的美濃か近畿圏からの搬入品としての位置づけも考えたいが、現況では産地不明の石塔であるといわざるをえない。今後の調査で解明したい。

かなきんさまの宝篋印塔については、遠江唯一の関西型式の宝篋印塔である。しかも、石材は砂粒は含むものの総じて緻密な砂岩であり、15世紀代の石塔に多用される粒子の荒い森町や掛川

係（馬淵和雄 2004）も視野に入れなければならないだろう。この視点に関しては遠江東部や駿河地域での安山岩製石塔とも共通する石材であるため、今後の検討課題としてさらに調査を進めることにしたい。

つぎに緑色凝灰岩製石塔について整理する。緑色凝灰岩製石塔については、遠江西・中部域では今のところ五輪塔しか知られておらず、宝篋印塔や宝塔については未見である。東遠江や西駿河では緑色凝灰岩製の宝篋印塔が多数見られることから、遠江西・中部域の緑色凝灰岩製石塔については、五輪塔が好まれて使用されていたことが判明した。

緑色凝灰岩製石塔の造立時期が刻まれた紀年銘資料は、遠江西・中部域内では今のところ知られていないが、東遠江まで広げると掛川市観音堂跡墓地の五輪塔地輪と思われる部分に貞和二年（1346）銘（戸塚和美 2000）、浜岡町正福寺の緑色凝灰岩製宝篋印塔に至徳元年（1386）銘（浜岡町教育委員会 2000）、相良町平田寺の緑色凝灰岩製の宝塔に延慶三年（1310）銘（本間岳人 1998）が確認できている。西駿河でも当目石の原産地付近の吉津墓地の緑色凝灰岩製宝篋印塔のなかに応永六年（1399）の紀年銘が確認されたものが報告されている（河合修 2004）ため、鎌田兵衛供養塔の紀年銘問題も現在確認できない現状から、緑色凝灰岩製石塔に関しても安山岩製石塔とほぼ同じ14世紀代の鎌倉末期～南北朝期に造立時期の主体があった可能性を指摘したい。ただし、幅20cm、高さ60cm以内の小型五輪塔については15世紀中葉以降の石塔が爆発的に増加する時期の製品としておく。

遠江西・中部域での緑色凝灰岩製石塔の分布は、岩水寺の勢力範囲、池田荘、見付宿（国府・守護所）、太田川水系の飯田・山名荘域に顕著に見られる。内陸部に多く見られる傾向から、陸路に関係した流通状況とも見られるが、分布域の中心には岩水寺や西楽寺等の有力真言密教系寺院が存在し、こうした寺院の僧侶が関与した宗教活動に利用されたものと考えられる。とくに、鎌田兵衛、源朝長、橘逸勢などの著名な歴史的人物を介在させた3基一対の供養塔を使った宗教行事が行われたことに注目したい。こうした故事来歴のある人物を介した供養塔は、安山岩製宝篋印塔の池田宿行興寺の遊女熊野の逸話にもとずく供養塔、あるいは浜松の康仁親王墓と称される安山岩製五輪塔の造立とも連動した動きと想定できる。行興寺に関しては時宗の寺であり、見付宿の一遍に縁のある西光寺の安山岩製宝塔とともに時宗の念仏集団が関わった可能性も指摘されるが、遠江西・中部域全域で時宗の念仏集団がすべての石塔の造立に関わったかは定かではない。おそらく、時宗だけでなく浄土宗等の鎌倉新仏教の勢力、真言・天台密教系寺院に属する旧仏教派集団と西駿河以東～伊豆地域での真言律宗系の宗教集団との係わりのなかで考えるべきものであろう。

緑色凝灰岩と安山岩製の両方の石塔が確認できたのは、見付宿、池田荘の2箇所である。見付宿に関しては浅羽湊（海路）と東海道（陸路）からの物資の流入という視点ばかりではなく、やはり中世においても国府や守護所が置かれていた遠江の政治的な中心地であったということが大きな要因となっていると考えられる。注目したいのは遠江国府の在庁官人を含む見付宿の町人の集団墓地と評価されている一の谷中世墳墓群遺跡からは、安山岩製石塔しか出土していないことである。しかも幅30cm、高さ80cm以内の小型品になるものばかりで、宝篋印塔も簡略化された時代の降るものであるのに対して、幅30cm、高さ80cm以上になる大型の五輪塔や宝篋印塔については宿場内や宿場周辺に展開する有力寺院内に存在していたことを明らかにできた。よって小型品石塔を墓石、大型品石塔を墓地に伴わない供養塔と考えることも可能であろうが、有力な寺院の僧侶や宿場を管理・運営していた上級町衆の墓石として安山岩や緑色凝灰岩製石塔が、これら寺院内に造立された可能性も低いながら考えられる。一の谷中世墳墓群遺跡の位置づけと石塔の性格を考えるうえで興味深い分布状況を示している。

最後に岩水寺や安泰寺墓地で確認された花崗岩製五輪塔と羽鳥荘のかなきんさまの砂岩製宝篋

5. 遠江中・西部域の出現期の石塔がもつ歴史的背景（考察）

以上のように、遠江の西・中部地域における出現期中世石塔については、伊豆産安山岩製品、焼津産緑色凝灰岩製品が主体となり、その分布傾向はある程度分かれると考えられ、造立の歴史的背景については様々であることが明らかとなった。

まず安山岩製石塔について整理してみたい。安山岩製石塔については、五輪塔と宝篋印塔の両方が見られる。造立時期が刻まれた紀年銘資料は、今回の調査では豊田町の妙法寺宝篋印塔で応永年間（1394～1428）が確認できたものが唯一で、塔の型式から見ると安山岩製宝篋印塔の中では新しい部類と見られるため、遠江に分布している安山岩製宝篋印塔の造立年代は14世紀中葉以降で、降っても15世紀初頭に主体があると考えられる。ちなみに東遠江まで視点を広げると、菊川町横地の三光寺跡裏山出土の安山岩B製宝篋印塔には文和五年（1355）銘、榛原町道場の清浄寺裏山出土の勝間田氏墓塔群のなかの安山岩B製宝篋印塔に文和二年（1353）銘石塔が知られ、榛原町釣学院には安山岩B製宝篋印塔に元徳四年（1332）銘の最古の紀年銘をもつ石塔が知られていることから、古くても14世紀前葉の鎌倉末期から南北朝期の14世紀中～後葉に造立の主体時期があったと想定される。

安山岩製五輪塔については年号の分かるものはないため造立年代は明確にはできないが、大きくとも高さ1m程度のもので小型のものが多いことから見て、安山岩製宝篋印塔とほぼ同時期である14世紀代の鎌倉末期～南北朝期に該当させておきたい。

安山岩製石塔の分布は、引馬宿（浜松荘）、池田荘、見付宿（国府・守護所）、美園御厨関係の寺院墓地等でみられ、桃崎氏が既に指摘している通り海岸部に近い場所に見られる。浜松荘の白羽湊（田尻湊）、池田荘・宿は川勾荘の掛塚湊、見付宿は浅羽湊に関係している可能性が指摘でき、あたかも湊を介した海運に関係し持ち込まれたような分布状況を示している。しかしながら、出現期の石塔は商品として流通していた可能性は低く極めて政治・宗教的なシンボルとして造立されているものと考えられ、伊豆からの運搬業者（宗教勢力）だけでなく石塔の製作工人の支配層（有力領主や僧侶）と強い関係をもたないと入手は不可能であったと考えられる。遠江の安山岩製石塔の分布状況をこの視点から考えると、湊を介した海運と東海道を介した陸運の2方面からの交通の要衝を掌握している場所の寺院に見られるという結果になった。すなわち遠江国府・守護所のある見付宿と浅羽湊、池田荘の池田宿と掛塚湊付近の黒島（現海老島）墓地付近に現在でも多く分布する傾向を読み取ることができ、さらに浜松の龍禅寺の複数の安山岩製五輪塔についても、白羽湊から馬込川を使った内陸水運と陸運の拠点である引馬宿の接点である内陸の津に関係した寺院、本光寺については川勾荘掛塚湊の西側に位置する重要な寺院、西伝寺についても白羽湊から芳川を使った内陸水運と陸運の拠点である蒲御厨内に所在した間宿の接点である内陸の津に関係した寺院と考えられるのである。ところが、浜北市史の悉皆調査では内陸部の美園御厨領域にまで安山岩製宝篋印塔の分布が広がっていることが判明した。おそらく美園御厨に対する物資流通の一端を白羽湊（田尻湊）か掛塚湊が担っていた寺院集団と、美園御厨の有力寺院集団との強い関係を示すものと指摘しておきたい。

伊豆側での中世石塔の石材を見てみると、今回遠江地域で確認できた安山岩A～Cの特徴を持つ石材で造られた石塔は、熱海を中心とする東伊豆北部～箱根あたりに多い石材のようであり、沼津周辺部の凝灰岩製の石塔とは全く異なるものである。ただし、伊豆半島～箱根全域において石材から見た中世石塔の地域色がどの程度なのか、中世石塔の石切場の状況がはっきりしていないため確定的なことを言える段階ではない。しかしながら、かりに遠江地域で分布している安山岩の石材と石塔が東伊豆北部～箱根あたりから持ち込まれたものであるならば、鎌倉後期～南北朝期にこの地域を支配していた北条～足利氏と同時期の遠江国守・守護が北条（大仏）～今川氏であったことが偶然であったとは思えないし、石工集団の大蔵派や真言律宗系集団との関

かのような製品であり戦国～江戸時代の石塔とは思えない。75・76についてもいずれも地輪幅29cm、水輪までの高さ54cmを計るもので、梵字や反花座74とほぼ同じ形態であることから、3基の五輪塔は同形態・同サイズのものとして見てよいだろう。緑色凝灰岩製五輪塔との共通点を見ると、既に触れたように火輪の形態ばかりでなく、空風輪と火輪の接合が、安山岩製五輪塔の大多数がほぞ穴型式であるのに対して、74がいずれも小穴があく型式(再加工あり?)、75・76が平らになる型式であり共通の要素が見られる。ただし、遠江で緑色凝灰岩製五輪塔で反花座をもつものではなく、この点に関しては安山岩製五輪塔・宝篋印塔をコピーしようとした組み合わせとなるかもしれない。となると、浜松市かなきんさまなどの古式の砂岩製宝篋印塔との関係が考えられるようになる。このように、この3基の石塔の造立時期は戦国～江戸時代になるとの意見もあるかも知れないが、全体の形態から見ると大型の緑色凝灰岩製五輪塔のコピーの可能性が大きく、時期も少し降るがそれ程違わない造立を考えておきたい。

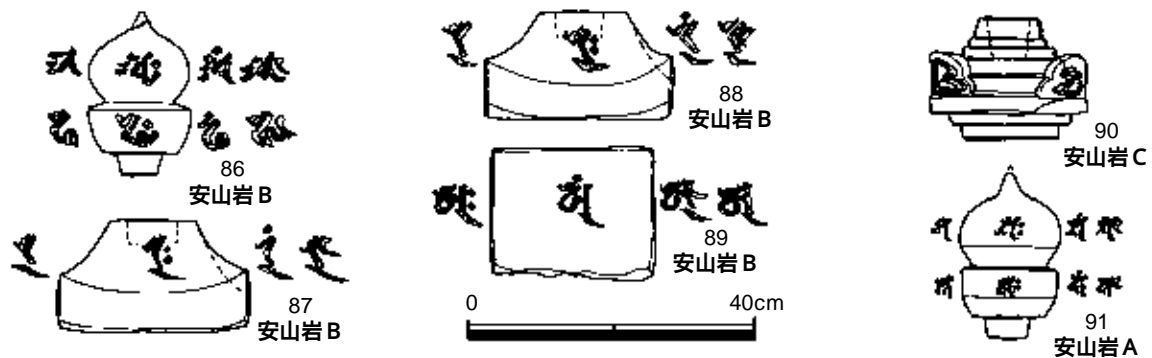
同様に西楽寺の近くの森町本立寺でも同サイズの砂岩製五輪塔が2基確認できた。第7図83～85に図示したもので、サイズから見ると3個体が確認でき、西楽寺と同様に3基一対の造立も考えられるようであるが、83の火輪幅は37cm、水輪幅は36cm、84の火輪幅は34cm、85の水輪幅は38cmを計ることから多少のばらつきが見られる。しかしながら、83・85の水輪の形態は扁平な形態をなして同一形態の五輪塔であるとして一見して分かる。84については、83の火輪と比べると反りが84の方が小さく梵字も入らないことから見てやや時代が降る要素も見られる。サイズとしては84が高さ42cmあり、源朝長・橘逸勢供養塔の同じ部分での高さが43～45cmあることから見ると、一番の大型品とほぼ同サイズで水輪が扁平な印象を受けるものの火輪が高く反りが大きく造られていること、火輪の頂部が平らであること、梵字も大きく全ての輪に入る可能性が高いことから見ると、84の火輪を除いた83・85の砂岩製五輪塔は、緑色凝灰岩製五輪塔のコピーといっても良いもので時代も然程降る製品ではなく、反花座は確認できなかったが西楽寺砂岩製五輪塔と同時期のものと考えてよいだろう。84が組み合わせになるかどうか疑問であるが、西楽寺の砂岩製五輪塔から推測すると源朝長・橘逸勢供養塔と同じく3基一対の五輪塔組み合わせになると推定される。

(3) 小 結

以上のように中世における飯田荘・山名荘域の出現期の石塔についてまとめると、安山岩製五輪塔と宝篋印塔については確認できなかったため、緑色凝灰岩製と砂岩製の五輪塔に限定できる。緑色凝灰岩製五輪塔は崇信寺や鈴木邸裏山中世墓で確認できた時代が降るとされる高さ50cm前後になる小型品を除くと、幅35cm前後、高さ90cmの大型品を中心とする大・中・小型の3基一対の組み合わせになる故事来歴のある敗者としての人物を媒介とした源朝長・橘逸勢供養塔が特徴的に見られた。西楽寺や本立寺の砂岩製の五輪塔についても同サイズの3基一対の五輪塔であった可能性が推定され、同一の仏教の布教活動に利用された石塔であった可能性を指摘しておきたい。

源朝長供養塔に関しては供養塔を管理する寺院である積雲院、鎌田兵衛供養塔でも萬福寺が同時に建立されていることから見ても、橘逸勢供養塔にも併設の寺院か仏堂が建立された可能性が高いと考えたい。こうした3基一対の五輪塔を使った何らかの仏教の布教活動は、西楽寺や本立寺の砂岩製五輪塔で見える限り、故事来歴のある人物を介在させない五輪塔として有力寺院内に取り込まれたとも考えられるが、崇信寺や宝太寺の緑色凝灰岩製五輪塔がそれに当たるのかどうかは残存した資料が少なく明らかにできなかった。少なくとも、西楽寺が現在でも改宗することなく真言宗の有力寺院としての法燈を保ち続けられたことを考えると、これらの石塔を介した布教活動に真言密教系の仏教集団が介在していたものと考えたい。

(松井)



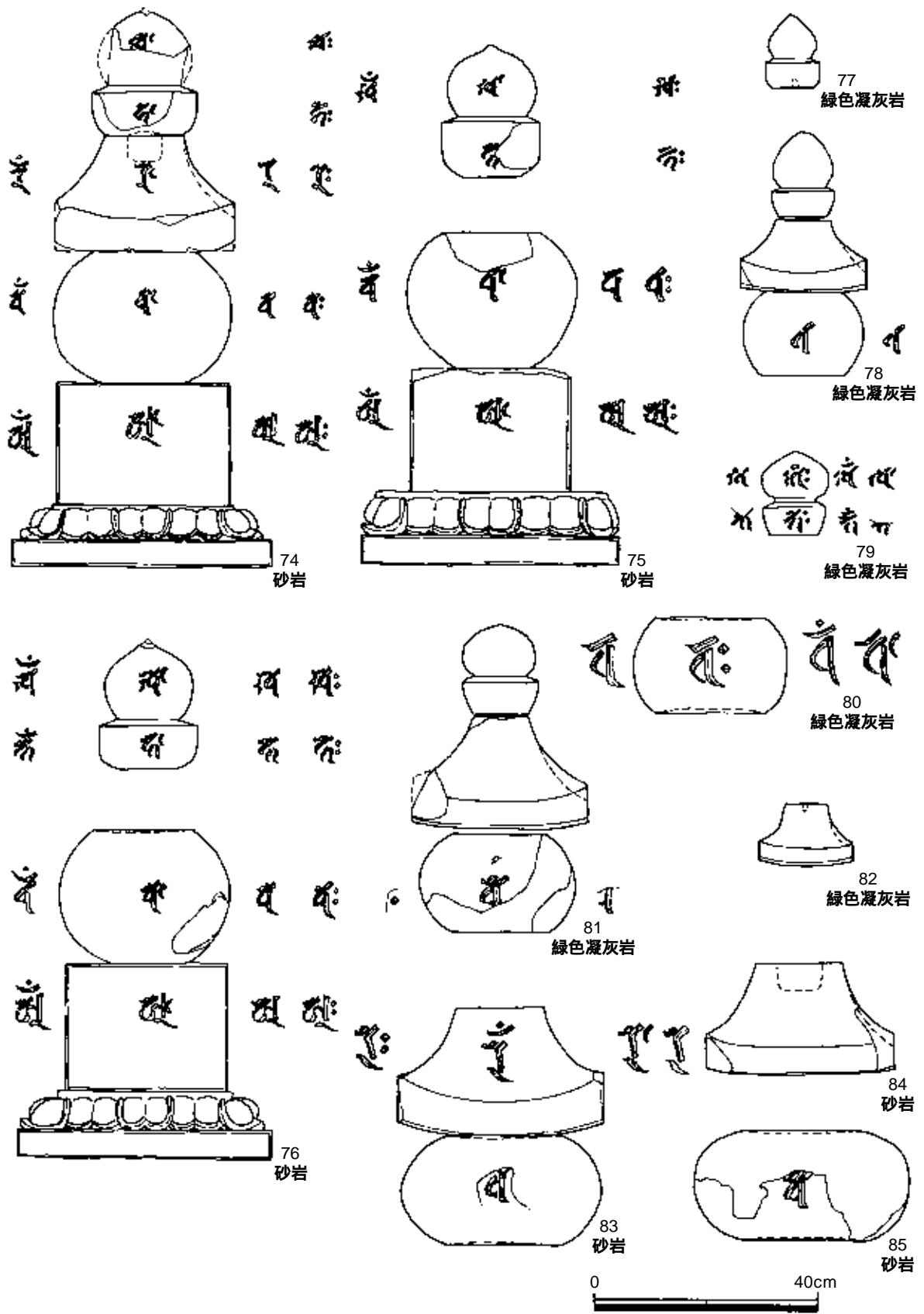
第8図 西・中遠江古式石塔実測図8 (86~90一の谷 91見付)

森町崇信寺で確認できた緑色凝灰岩製の五輪塔を第7図77~80に図示した。北島恵介氏のご教示によると、この石塔は付近の墓地から持込まれ、墓地は在地領主の山内氏や飯田氏との関係も指摘されている。空・風輪から見ると3個体が確認できるので、最低3個体の緑色凝灰岩の五輪塔があったと考えられる。サイズから見ると78が同一個体と思われるが、地輪を欠く。80は水輪のみであるが一番大きなサイズの石塔で水輪幅27cm、高さ17cmを計るもので、源朝長供養塔・橘逸勢供養塔の一番小さいサイズの69や73の石塔と同サイズの五輪塔が想定され、高さ70cm程度のものとなるのか。梵字の具合から見て79が同一個体となるかも知れないがやや小振りである。次に78は火輪幅23cm、現存の高さ44cmを計るもので、源朝長供養塔・橘逸勢供養塔の一番小さいサイズの石塔よりも、さらに小さい五輪塔が想定され高さ60cm程度のものとなるのか。77の空風輪も幅9cm、高さ13cmの小型品で、これらはさらに高さ50cm前後になる小型石塔になるものと考えらる。組み合わせから見ると大・中・小型製品での組み合わせとなりそうであるが、先に紹介した源朝長供養塔・橘逸勢供養塔の組み合わせと比較すると、全体の大きさが違う点や、梵字の描かれ方に統一制がない点などから、3基一対の組み合わせになる供養塔とは考えられない。79・80を除いて時代が降る製品であろう。

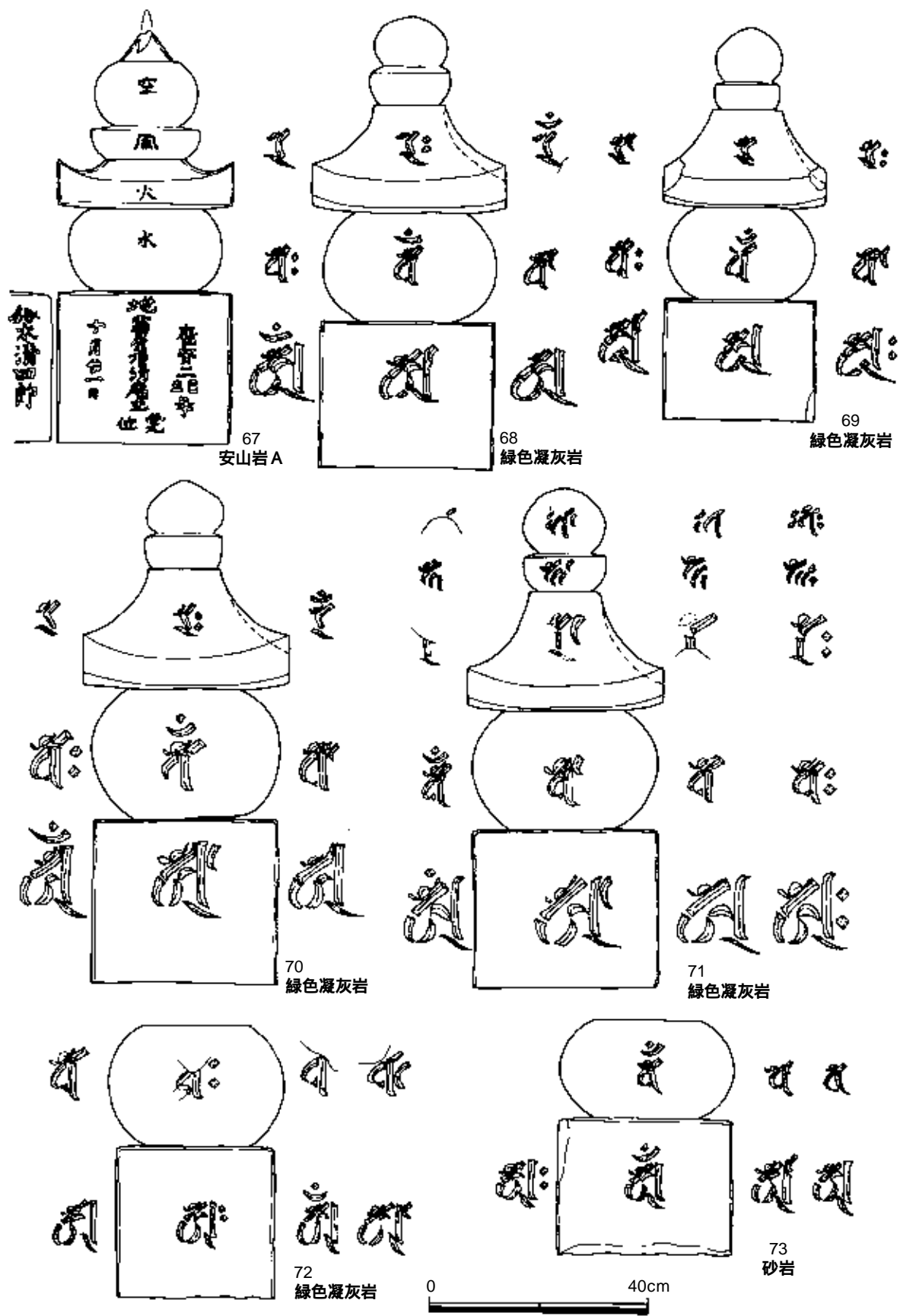
森町宝太寺で確認できた緑色凝灰岩製の五輪塔を第7図81に図示した。材質・サイズから見ると、同一個体の緑色凝灰岩製五輪塔であったと考えられるが地輪を欠く。81は火輪の幅32cm、水輪幅28cm、現存の高さ54cmを計るもので、源朝長供養塔・橘逸勢供養塔の一番小さいサイズの69や73の石塔と同サイズの五輪塔が想定され高さ70cm程度のものとなるのか。空風輪と火輪の梵字は省略されるものの、源朝長供養塔・橘逸勢供養塔とほぼ同時期の製品と考えてもよいだろう。

森町高屋敷遺跡(鈴木邸裏山中世墓)で確認できた緑色凝灰岩製の五輪塔を第7図82に図示した。火輪のみで、幅17cmを計る小型品である。崇信寺で確認された最小の五輪塔である高さ50cm程度のものとなるのか。時代としては源朝長供養塔・橘逸勢供養塔よりも明らかに降る製品と考えてもよいだろう。

最後に古手の砂岩製五輪塔を紹介したい。袋井市西楽寺墓地に所在する3基の砂岩製五輪塔を第7図74~76に図示した。サイズから見ると74は完形品と思われるが、75と76は何れも火輪を欠く。74は完形品で火輪幅32cm、地輪幅31cm、高さ98cmを計るものである。火輪と地輪幅は1cm程度しか変わらず源朝長・橘逸勢供養塔とは異なる造作であったと考えられるが、サイズとしては反花座を外すと高さ88cm程度にはなるため一番の大型品とほぼ同サイズで、火輪が高く反りが大きく造られている点からは同形態の製品であることが確認できた。梵字は全ての輪に施されるが、緑色凝灰岩製五輪塔の梵字と比較すると何れもかなり小さく時代が降る製品にも見えるが、反花座の形態は江戸時代の墓塔には見られないものである。反花座は中央の花弁が両側の花弁に被るなどの新しそうな要素もあるが、当地域に分布する古手の宝篋印塔の反花座を模した



第7図 西・中遠江古式石塔実測図7 (74~76 西楽寺 77~80 崇信寺 81 宝太寺 82 高屋敷 83~85 本立寺)



第6図 西・中遠江古式石塔実測図6 (67 定光寺 68~70 積雲院源朝長供養塔 71~73 用福寺橘逸勢供養塔)

て捕らえられ伊豆に流罪（後に冤罪と判明）になる途中、遠江国板築駅で没したと伝えられる人物である。板築駅は三ヶ日町日比沢とする説もあるが、供養塔の存在する地は古代において近年周智郡衙として注目されている稲荷領家・春岡遺跡が所在し、古代においては郡衙と駅家が併設される場合が多いことから見ると、山梨地内に駅家が存在していた可能性も大いに考えられる。

源朝長供養塔は江戸末期に編纂された『遠江古迹図会』においても、積雲院の門前に描かれている有名な供養塔である。源朝長は源義朝の次男で、鎌倉幕府を開いた頼朝の兄にあたる人物である。平治元年（1159）の平清盛中心とする平氏と源義朝を中心とする源氏の争いである平治の乱で、源氏が敗北し京を逃れた朝長は岐阜県（青墓）で自害し家臣の大谷忠太が朝長の首を故郷の大谷の地に埋めたと言われており、積雲院は兄朝長のために頼朝が建立したとも伝えられている。鎌田兵衛供養塔に関しても石塔を供養するための萬福寺が建立されており、同一の経緯・歴史的背景が存在し造立された供養塔と考えられる。おそらく、橘逸勢供養塔に関しても供養塔に係わる仏堂が寺院が存在していた可能性が考えられる。

以上袋井市・森町域の出現期の石塔に関しては、太田流域に散在分布する状況が見取れるが、寺院に関係したものと故事来歴のある人物の供養塔の一群が注目される資料である。

（２）石塔の説明

袋井市・森町域の出現期の石塔については第6図・第7図に示した。まず、袋井市積雲院の源朝長供養塔の3基の石塔を紹介したい。第6図68～70に図示したもので、3基とも緑色凝灰岩製の五輪塔で、サイズから見ると何れも完形品と思われる。70は一番大きなサイズで火輪幅38cm、地輪幅34cm、高さ90cmを計るものである。火輪と地輪幅が4cm程度異なっている点が気になるが、極めて材質の近い石材で造られているように見られるため同一個体の誤差の範囲と見たい。68は火輪幅36cm、地輪幅32cm、高さ81cmを計るものである。68についても火輪と地輪幅が4cm程度異なることから70とともに火輪を大きく見せる造作であったとも考えられる。ただし火輪の部分についてはやや扁平な印象を与える。69は火輪幅30cm、地輪幅28cm、高さ71cmを計るものである。69も火輪のサイズが2cm大きい特徴がある。梵字に関しては68と69が類似し70とはやや異なる字体であるが、何れも空風輪の梵字が省略され、火輪の幅が大きくなる特徴から、大きさに関係なく3基一対の同時造立と考えたい。

ちなみに、絵図から推定すると石塔に向かって（南より？見て）左側の一番大きい70が義朝、中央の次に大きい68が義平、右の一番小さい69が朝長ということになる。しかしながら、現在の位置は石塔に向かって（南より見て）68が左、70が中央、69が右で、68と70が入れ替わっている可能性が指摘できるが、これは絵図の大きさが正しい前提での推測である。

つぎに、袋井市用福寺の橘逸勢供養塔の3基の石塔を紹介したい。第6図71～73に図示したもので、71と72の2基が緑色凝灰岩製、73の1基が緻密な砂岩製の五輪塔である。サイズから見ると71は完形品と思われるが、72と73は空風輪・火輪を欠く。71は一番大きなサイズの石塔で火輪幅36cm、地輪幅32cm、高さ90cmを計るものである。火輪と地輪幅が4cm程度異なっている点は、源朝長供養塔と同じく火輪を大きく見せる造作であったと考えられる。さらに、71は70とはほぼ同サイズ、同形態の製品であることが確認できた。72は地輪幅29cm、水輪までの高さ49cmを計るものである。おそらく高さ80cm程度にはなる製品で源朝長供養塔の68のサイズに近いものと考えられる。73は地輪幅32cm、水輪までの高さ42cmを計るものである。これもおそらく高さ70cm程度の製品で69のサイズに近いものと考えられる。梵字に関しても中・小サイズの72と73が類似し71とはやや異なる字体であり、この点に関しても源朝長供養塔と類似した状況がある。ただし、73については砂岩製品であるため後補の可能性も指摘できるものの、何れも梵字組み合わせや大・中・小型品の組み合わせになることから見て、元来3基一対の同時造立と考えたい。

じる内陸部の水運を利用した遠江国府や池田荘域への物資流通に関わるものとして考えたい。鎌倉時代の遠江国守・守護が北条（大仏）氏、南北朝期が今川氏であることから考えると、北条氏や足利氏支配した伊豆の安山岩製品、今川氏が支配した西駿河の焼津産緑色凝灰岩（当目石）を、国守・守護から寺院が行う経済活動を保護された各寺院の布教活動や有力者や僧の墓石として利用し、石塔を造立するための石材として入手することは容易であったと想定される歴史的背景が見て取れる。また、比較的内陸部に分布が確認できる緑色凝灰岩製品については陸路での運搬も考えられ、遠江において陸運と海運を掌握した政治・経済の中心地域としての遠江国府が所在した見付宿と、その周辺の池田荘域に緑色凝灰岩製品と安山岩製品が混在して存在する意義を見出したい。

なお今回の調査では、池田荘東南部に設けられた墓域が解体される過程で、墓地所属の出現期の石塔が現在の竜洋町海老島や磐田市小島地域の各寺院に再編吸収された状況が確認できた。これらの石塔の石材も、浅羽湊や掛塚湊を通じた海路からの搬入なくしては考えられない状況であろう。

池田宿の石塔に関しては、行興寺の熊野御前の逸話に基づき安山岩製の供養塔が、妙法寺の応永年間銘の宝篋印塔から比較すると14世紀末に造立されたことが判明した。熊野御前の逸話から実に200年後の造塔であるが、これらの石塔の石材の入手経路についても掛塚湊や浅羽湊の海路を考えないと理解できない状況であろう。

鎌田兵衛供養塔の紀年銘は今回の調査では明かにできなかった。史実では鎌田兵衛正清が磐田市鎌田の出身者がどうか明らかではないが、源義朝とともに尾張国知多で殺害された来歴の持ち主である。源朝長も後項のように源平の騒乱のなかで謀殺され、橘逸勢も古代の藤原氏との政権をめくり非業の死を迎え、いづれも騒乱の中で敗者として死亡するという共通の来歴をもつ著名人の供養塔である点が注目される。江戸時代に確認できた鎌田兵衛供養塔の紀年銘が仮に正しいものならば、鎌倉時代末期の鎌倉政権の乱れから地方の世情も乱れ、石塔を使用した仏教行事により集団の結束力を保とうとした地方の人々の姿が想像される。

（木村）

4．袋井・森地域

（1）石塔造立の歴史的景観

袋井・森地域での石塔の分布は、太田川流域に沿って散在して分布する傾向が読み取れるが、袋井市山梨とその周辺地域に分布の中心が読み取れる。すなわち、太田川流域においては中世寺院として最も有力な西楽寺を中心とする地域である。西楽寺は現在でも真言宗の有力寺院であり、県指定の江戸時代前期の本堂や藤原期の仏像などが伝来している古刹でもある。中世の西楽寺周辺は山名荘に含まれ、袋井宿周辺部とともに中世山名荘の中心地域の一つであろう山梨地域の最有力寺院となっている。

飯田の崇信寺については中世遠江において新興の曹洞宗の基礎を築いた如仲天^三が応永8年（1401）に最初に開いた寺院である。江戸時代においては可睡齋が遠江の曹洞宗の中心寺院となったが、崇信寺は当地域では曹洞宗の最古の寺院であるばかりでなく、飯田荘域における中心的な寺院であったとも想定される。今回紹介する宝太寺や鈴木氏裏山中世墓に関しても飯田荘域に属するものと考えられる。

これら寺院関連の石塔以外では、積雲院の源朝長供養塔や用福寺の橘逸勢供養塔などの有名人物の供養塔として造立されたものが特徴的に見られた。磐田市の鎌田兵衛供養塔も一連のものとして理解される。橘逸勢供養塔は現在の太田川にかけられていた板築橋の前身の木橋付近に存在したと言われている。橘逸勢は承和9年（842）に起こった承和の乱の首謀者の一人とし

石塔群である可能性が最も高いと考えられる。

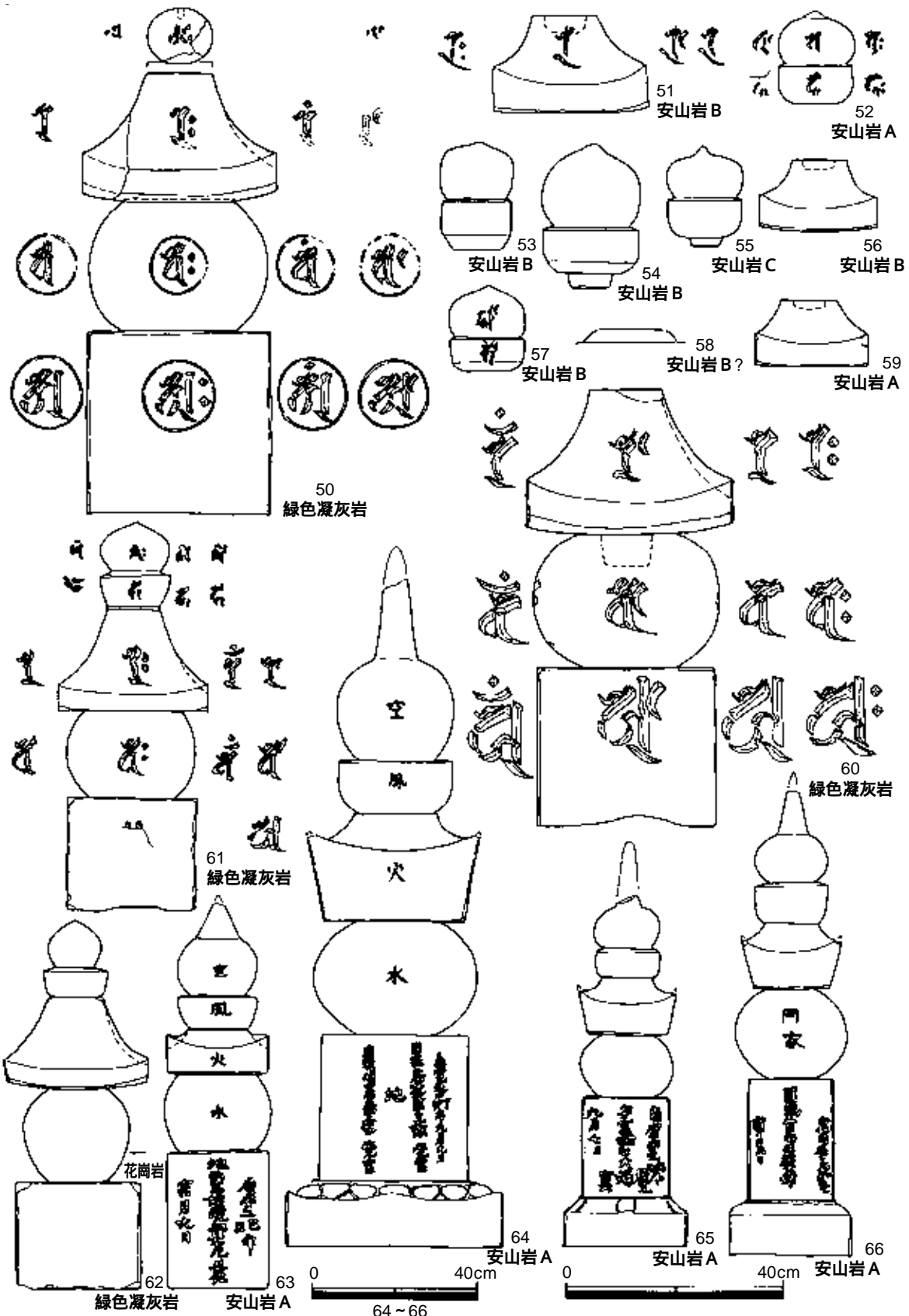
59の安山岩製小型五輪塔の火輪は、浅羽湊に付属した万福寺墓地に見られたもので、小型品ながら浅羽湊に関係した寺院に造立された石塔として評価されるものであろう。ちなみに海岸部（第1～2砂丘列）に最も近い寺院のなかで、古式の石塔が確認できたのはこの資料だけで、現掛塚地域内の寺院や浅羽町域の海岸部の寺院墓地では14世紀代の石塔どころか15世紀以降の石塔もほとんど確認することはできなかった。おそらく近世の度重なる津波で流失してしまった可能性が高いと考えられる。

第5図60～62は鎌田御厨地内の萬福寺境内（全久院末寺、現在廃寺）にあったとされる「鎌田兵衛正清」の墓塔と伝えられる緑色凝灰岩製五輪塔3基である。さや堂中央に据えられた60の五輪塔は、空風輪を欠失するものの現高は79cm、火輪幅37cm、水輪幅34cm、地輪幅33cmを計り、おそらく復元高100cm近くなる大型の五輪塔である。火輪と水・地輪幅が異なるため別個体の可能性もあるが、梵字は同一の作風で刻まれているため同一個体と考えられ、水・地輪幅に対して火輪幅が少し大きくし、石塔を美しく見せようとした造作と見たい。61は完品で、全高70cm、火輪幅27cm、水・地輪幅23cmを計ることから、60と同じく水・地輪幅に対して火輪幅を大きく見せる特徴が見て取れること、梵字も各輪すべてに刻まれることから60と同一時期の製品と考えられる。62は水輪が西三河産花崗岩製五輪塔の部材の再利用で完形品ではない。空風・火・地輪に関しては梵字は刻まれていないものの61とほぼ同じサイズのものであることから見て、60～62は同一時期で3基一対で造立された可能性が高い。今回の調査で全久院所蔵の萬福寺が描かれた江戸時代絵図の写を実見することができ、鎌田兵衛供養塔が3基の五輪塔からなることが分かり、他の墓石は描かれていないため萬福寺がこの供養塔のために建立された寺であることも判明した。なお、江戸時代後期に編纂された『遠江風土記伝』によると、この石塔には「永仁七年（1299）巳亥正月廿二日」の紀年銘があったと書かれているが、現在では風化のためか読み取れない。この年号が正しいものならば、遠江地域に造立される緑色凝灰岩製五輪塔のうち鎌田兵衛供養塔と同一の契機で造立されたと想定される袋井市の橘逸勢供養塔や源朝長供養塔などの3基一対の供養塔群についての造立年代が13世紀末～14世紀の初頭の年代を与える根拠となるが、残念ながら今回の調査ではそれを確認することはできなかった。

第5図63～66、第6図67は磐田市の見付から前野に移転した現在の定光寺で確認できた江戸時代前半の安山岩製五輪塔で、63と67は一石五輪塔で僧墓に関するもの、64～66は組合式五輪塔で特定家系墓塔群に所属する。遠江中部域で江戸前期の安山岩製墓塔としてはこれが唯一のものであるため参考品ながら掲載した。なお、遠江中部域の江戸時代前～中期の幅での安山岩製墓塔を観察すると、石材としては安山岩Aに限定されるため伊豆東岸北部域でも特定の石切場から持ち出された製品であると考えられる。ちなみに寺伝によると定光寺は徳川家光よりの庇護を受けておりその年代が慶安二年（1649）であることと、石塔に刻まれた年号に63・67の慶安二年銘、65の慶安元年銘があることは無関係とは思えない。かつて今川範国墓塔が所在したと伝えられる由緒ある定光寺に見合う墓塔群として注目される。

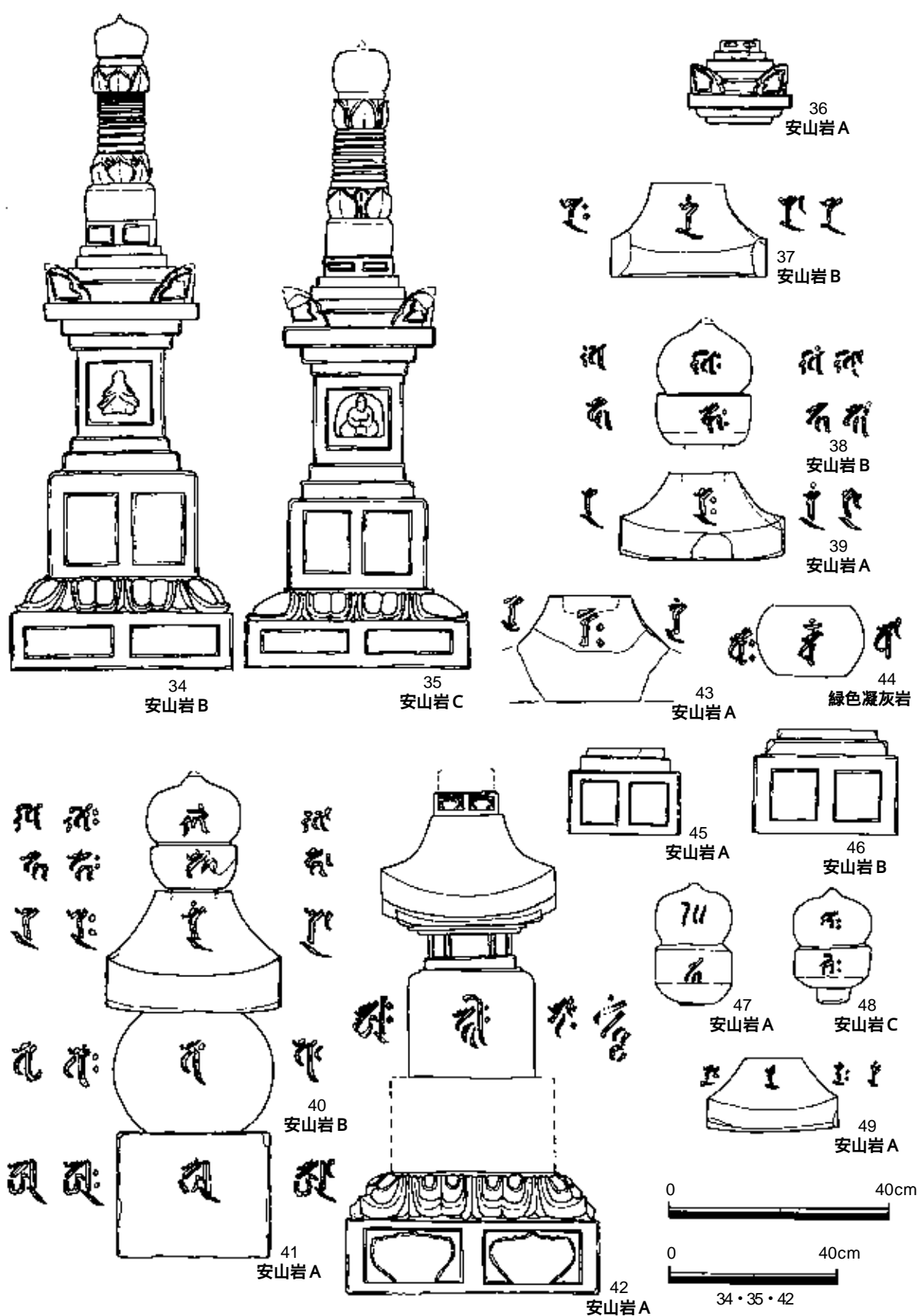
（3）小 結

中世見付宿（遠江国府・守護所）・池田荘（宿）にかかわる出現期の石塔についてまとめると、石材については安山岩製品がほとんどで、緑色凝灰岩製品については見付宿や池田荘で僅かに認められ、安山岩製品は五輪塔、宝篋印塔や宝塔などのバラエティが認められたのに対して、緑色凝灰岩製品については五輪塔に限定される。安山岩製品については伊豆地域という遠隔地からの製品という前提に立てば、やはり海路からの搬入という視点で見ることが妥当であろう。今回の調査では浅羽湊関係の万福寺の石塔が注目され、外洋からの浅羽湊や掛塚湊を介した今之浦に通



第5図 西・中遠江古式石塔実測図5

(50 十輪寺 51 千手寺 52 西法寺 53 正眼院 54 心光寺地藏堂 55・56 法幢寺
57・58 心月寺 59 万福寺 60~62 鎌田兵衛供養塔 63~66 定光寺)



第4図 西・中遠江古式石塔実測図4
 (34~36 行興寺 37 西法寺 38~41 見性寺 42 西光寺 43~46 慶岩寺 47~49 福王寺)

輪塔の空風輪2基、火輪1基である。元は見付宿の定光寺（東光寺）に祀られていたものと推測される。サイズから見ると47の空風輪は見性寺の40に匹敵するものであるのに対して、48の空風輪と49の火輪はやや小型で47と比較すると時代が降る可能性がある。

86～90は一の谷中世墳墓群遺跡出土の安山岩製の五輪塔と宝篋印塔の部材である。同遺跡からは200点あまりの石塔の部材が出土しているが、古式のものとして86～90の安山岩製の石塔をあげて14世紀代の製品として位置付けている。出土地点も墓域北端東緩斜面部に集中している。87・88の火輪の幅は26cm前後の製品で見性寺の40の五輪塔よりも一回り小型のものである。86の空風輪についても40の空風輪と比較すると小型であり、87・88と同サイズ五輪塔の部材である。おそらく何れも高さ70～60cmサイズになるものかと思われる。実見の結果、石材は何れも安山岩Bであるが、個体別に見ると微妙に異なることから3基とも別個体の部材と考えられる。90の宝篋印塔の笠部分については、隅飾りは直立するものの内部の文様は沈線化しており、15世紀代に降る可能性が高いものと考えられる。ほかに安山岩製の宝篋印塔基礎1点が報告されているが、今回の実見結果からは砂岩製品であることが判明した。なお、91の安山岩製五輪塔の空風輪は見付出土のものとしてされるが詳細な出土地点は不明である。しかしながら、一の谷中世墳墓群遺跡からの出土の可能性もあるため参考までに掲載した。石材から見ると安山岩Aであるため、同遺跡出土の安山岩製五輪塔とは別個体となる。サイズは86の空風輪とほぼ同じでさほど大型の製品になるとはいえない。

つぎに、池田宿に関わる石塔について紹介する。第3図31～33、第4図34～37に示したものが該当する。31～36はいずれも関東型式の宝篋印塔で、石材は安山岩A～Cとすべて揃っている。34・35は行興寺の「熊野御前」と「熊野御前の母」の墓と伝えられる墓塔である。34は「熊野御前の母」の墓塔と伝えられるもので、全高158cmを計り、反花座高22cm、反花は複弁二葉で塔身の四面に阿弥陀仏を配しており、笠は笠下二段、軒上五段である。35は「熊野御前」の墓塔で、全高151cmを計る、反花座高19cmを計るほか反花座や塔身、笠は同形態である。33についても相輪部は欠失しているがこれら2基と同形態であるが、やや小型で現高60.8cmを計る。基礎には「応永 年 八月 日」の紀年銘がかすかではあるが読み取れる。『豊田町誌』によれば、応永年間には1394年～1427年であることを考慮し、この宝篋印塔の反花が退化傾向を示していることから、33を15世紀初頭の製品とし、34・35については33より古相を示していることから14世紀末の時期と推定されている（清水尚 1998）。37は行興寺に隣接する西法寺墓地で発見した安山岩製五輪塔の火輪で、28cmを測ることから高さ70cm程度の大きさの五輪塔になるであろう。西法寺は時宗の寺院ではないため、安山岩製の石塔が池田宿の時宗以外の寺院にも見られるものとして注目したい。

第5図50～59は池田荘に関わると思われる石塔である。50は十輪寺墓地にある緑色凝灰岩製の五輪塔で、火・水輪に、月輪を伴う梵字が刻まれている。火輪までの現高は80cm、火輪幅35cm、地輪幅33cm、同高33cmの正方形の地輪を呈するが、全体としては縦長の印象を受ける大型の五輪塔である。火輪には月輪がないため別個体の製品とも考えられるが、サイズとしては水・地輪とほぼ一致するため同一個体として紹介しておきたい。

安山岩製の五輪塔の部材は、今回の調査で51の千手寺、52の西法寺、53の正眼寺、54の心光寺地蔵堂、55・56の法懂寺、57・58の心月寺等の集中した地域の寺から多数確認できた。54の空風輪は見性寺の40の五輪塔よりも大型で高さ100cm以上になる五輪塔の部材になる可能性はあるが梵字は刻まれていない。51の火輪は、幅28cmであるため高さ70cm程度にはなりそうな五輪塔の部材であろう。その他の空風輪や火輪はいずれも小型であり、高さ70cm以内になる小型の五輪塔の部材であろう。このようにごく狭い範囲の寺院墓地に多数の安山岩製五輪塔が見られる原因としては、冒頭でも述べた通り、**鳥島**（現海老島か？）にあったとされる池田荘墓地から散逸した

勢力を懐柔しようと画策を試みている。遠江国府の有力在庁官人の一人である勝間田氏は、時宗に帰依し本貫地の時宗寺院である清浄寺を菩提寺としている。遠江国内には時宗寺院が13ヶ寺あり、うち改宗・開基とされる寺院は6ヶ寺である。見付宿内では西光寺、省光寺、蓮光寺（廃寺）が時宗寺院であり、省光寺末寺のひとつに池田宿の行興寺があげられる。改宗した寺院はいつれもかつては真言宗や天台宗などの密教系の寺院であった。時代は降るが今回紹介する磐田市の源義朝の従者鎌田兵衛正清の供養塔、袋井市の源朝長供養塔も、時宗の宗教政策に関係したものと見えようか、今回この点も検討課題としたい。

鎌倉幕府滅亡以降南北町期に遠江国守・守護となったのは足利一族でも名門である今川範国である。範国は見付で没したとされる人物で、法号である「定光寺」はかつて見付にあったとされている（『駿河誌料』）。現在福王寺に所在する今川範国供養塔は、この定光寺から移されたものである。また、今回江戸時代の石塔について報告する磐田市前野に所在する定光寺がそれである。

室町時代になると今川氏から斯波氏へと遠江国守・守護の職が代わり、国守・守護や守護代も遠江国にいない状態が長く続くものの、在庁官人層を中心として領国内の津湊や陸路の道路網の整備がなされることにより経済の統制が図られ安定した時代を迎えた。また、戦国時代になると遠江国には再び駿河今川氏の勢力が進行し始め、今川氏による舟役の免除を行うことにより寺院勢力の経済的な保護が図られた。

以上のように、遠江国府・守護所（見付宿）、池田荘（池田宿）に所在する寺院は、代々の遠江国守・守護により保護されることにより統制を受けていたものと考えられる。今回紹介することのできた出現期の石塔が、遠江国外の伊豆や焼津といった遠距離地から運ばれてきた石材により造られていた歴史的背景の一旦として、代々の遠江国守・守護による宗教政策が表れているものと推測されるのである。

（2）石塔の説明

磐田市・豊田町域の石塔については、第3図～第6図及び第8図に示した。まず、見付宿にかかわる石塔について紹介する。第4図38～39及び第8図に示した。石材は44を除いてすべて安山岩製である。38～41は見性寺の五輪塔で、このうち40・41は完形品と思われた組み合わせのものであるが、仔細に観察すると火輪幅32cmに対して、地輪幅が28cmと小さく石材も地輪が安山岩Aであるのに対してそれ以外は安山岩Bとなるため、今回の調査で別個体であると考えた。おそらく、石材とサイズから見ると39と41が組み合わせになると考えられる。39は火輪の幅は30cm近くなるが高が低く反りが大きめであるため、40よりも少し時代が降る可能性を指摘したい。38の空風輪は40の空風輪と同じサイズであることから、高さ80cm以上の安山岩製の石塔が見性寺には3基も存在していたと想定される。

42は西光寺にある関東型式の宝塔で、相輪と基礎を欠失しているが現高97cmを計るものである。塔身の扉の表現は省略され、四方に梵字が刻まれ、軸部に高欄、台部に柱形4本が設けられている。反花座の格狭間は二区を配し、反花は複弁二葉である。なお、本間岳人氏はこの宝塔に関して鎌倉の嘉暦二年（1327）銘塔と比較し、格狭間の退化傾向や塔身の扉の省略などから、南北朝期初頭の造立年代を推定している（本間岳人 1998）。

43～46は慶岩寺の五輪塔火輪と宝篋印塔基台である。43はかなり欠損しているものの現存の範囲から見て見性寺の40とほぼ同じサイズの安山岩製の五輪塔になるものと考えられる。44は緑色凝灰岩製の小型五輪塔の水輪で比較的丁寧な梵字が刻まれているため、時代は然程降らないものと考えたい。45・46は関東型式の宝篋印塔の基礎で、サイズの的には22や33と同様にやや小型の部類に属するもので15世紀初頭に降る可能性のある製品であろう。

47～49は現在、福王寺にある今川範国墓と伝えられる墓塔の付近に置かれている安山岩製の五

多い。内陸部でも陸上交通だけでなく、舟を利用した水上交通網が重視されていたことを示し、出現期の石塔を残す寺社はこうした権益の集積地の周辺部に存在しているように見える。太平洋岸には前述した掛塚湊のほか、馬込川河口部に田尻や白羽などの複数の湊があって盛衰を繰り返していたと考えられる。これらの湊に集散した物資は河川を通して、それぞれの上流に位置する荘園の中核部とネットワークを形成していたはずで、石塔の分布もそれを示すひとつの証左となり得よう。

池田荘のうち、浜松市域内には目立った石塔が現存しない。次項に紹介されているように天竜川東岸の状況とは異なっている。立券状によれば東岸にあたる現竜洋町海老塚から磐田市小島に比定される坪に、唯一「墓」という記載がある。土地利用上目立つ塚があったと考えられるところで、塚墓推定域周辺部には安山岩製石塔が多数現存していることが今回の調査で判明した。また、立券状からは立荘時の池田宿が浜松市飯田地区付近と推定されるのだが、豊田町池田付近に複数の出現期の石塔が現存することが判明した。石塔造立時期までに池田宿の衰退と移転があったことを窺うことのできる資料となったのである。

(太田)

3. 磐田市・豊田町地域

(1) 石塔造立の歴史的景観

磐田市・豊田町地域での石塔の分布は、1 磐田市西南部(旧長野村)・豊田町(池田)・竜洋町北部、2 磐田市見付地区の2箇所に分布している。これら2箇所は、中世には1 池田荘・池田宿、2 見付宿(国府・守護所)が存在したところである。

池田荘の成立は明らかではないが、嘉応三年(1171)二月の遠江国池田荘立券状(「松尾大社文書」)によれば、長承年間(1132~1135)には荘域は成立していたと推定されている。荘域の東の境を天竜川としていたことが、『東関紀行』、『十六夜日記』などより明らかである。その範囲は、豊田町を中心として浜松市・竜洋町・磐田市に渡る広域な範囲をもつ荘園であった。立券状から見ると地目には田、畠、河、浜などのほか、鳴に墓地があった記載が認められ、墓地については太田好治氏らの考察によると、現在の竜洋町海老島にその存在が推定されている(谷岡武雄 1966、太田好治 2001ほか)。ちなみに、今回調査した第1表25~31の寺院がこの墓地に関わる地域に該当していると考えられる。

見付は平安時代に遠江国府が所在し、中世にはあわせて守護所が置かれていた遠江国の中心地である。平安時代末期の保元の乱(1156)以降、平宗盛、基盛、信業などの平氏一門が相次いで遠江国守となり、この地域に平氏の勢力を根付かせた。重盛(法名=城蓮)が平清盛の冥福を祈るための三ヶ寺である蓮福寺・蓮城寺・蓮覚寺を造営したと伝えられていることは遠江国府での平氏の勢力の一端を示す逸話であろう。見付宿の西北(乾)の方向に一の谷中世墳墓群が築かれ始めたのもこの時期で、被葬者はこの地を実質支配した在庁官人(目代) 後に見付町衆へと変遷したものと推定されている(磐田市教育委員会 1993)。一の谷中世墳墓群遺跡からも何基かの石塔が出土しており、今回そのうち初期の造立と考えられている安山岩製の石塔を紹介する。

このほかに、池田宿には平宗盛の妾である「熊野御前」、池田荘の千手堂には平重衡と遊女である「千手の前」との物語が伝えられている。なお、豊田町行興寺には今回紹介する「熊野御前」と「熊野御前の母」の墓碑が祀られ、磐田市小島には「白拍子」「千手堂」「野箱」などの「千手の前」にまつわる地名が残されている。

鎌倉幕府が成立すると遠江地域の平氏勢力を一掃しようとした源頼朝は、安田義定を遠江国守としたが、義定勢力拡大を恐れた頼朝の謀略により義定は失脚した。以後鎌倉幕府滅亡まで遠江の国守・守護は北条氏一門の大仏氏が歴任することになる。大仏氏は時宗を保護して在地の武士

(3) 小 結

浜北市域では浜北市史編纂事業による悉皆調査がなされ報告されているが、浜松市域ではそこまでの精度に至っていない段階であることをまず打ち明けておく。ただし、浜松市域においても目的は異なるが、市民と共に組織した浜松市石造文化財調査会の報告書を参照し（浜松市石造文化財調査会 2001）、とくに古い段階の石塔で大きな遺漏はないと判断している。戦災で市街地の寺院が壊滅していること、墓地整理が進んで石塔残欠が処分された可能性も考慮しなければならないが、比較的石塔の造立が少なかった地域といえるだろう。

浜北市域では平野北端部を占める岩水寺を中心とする密教系寺院群が、初現期の石塔の導入にあたって大きな役割を果たしたと考えられる。現存例は少ないが、西方からの先駆的な石塔を導入した後に、駿河地域の石材（緑色凝灰岩）と石工による石塔導入の経路を開いたようである。積極的に見ればこうした経路は学園寺付近まで及んだが、それより南の美園御厨をはじめとした各荘園領域内にはあまり影響が見られない。もっとも石塔出現期である鎌倉末期～南北朝期には美園御厨の実体はなく、いくつかの郷に分かれていたようである。

蒲御厨以南では各荘域の有力寺社に古い石塔が散見できる。ほとんどは伊豆産の数種類の安山岩であり、浜北市域の石材と明確に区別ができる。これらの石材による石塔は、別項にもあるように海上交通により海岸部から内陸部に流通させたとの考え方を追認する状況である。ただし、掲載した石塔が所在する荘園も寺社の宗派もそれぞれ異なることから見ると、在地の特定の荘園領主や宗派の寺院が単独で形成した経路とは考えられない。寺院経営のための勧進のひとつの形式を表す状況といえるだろう。

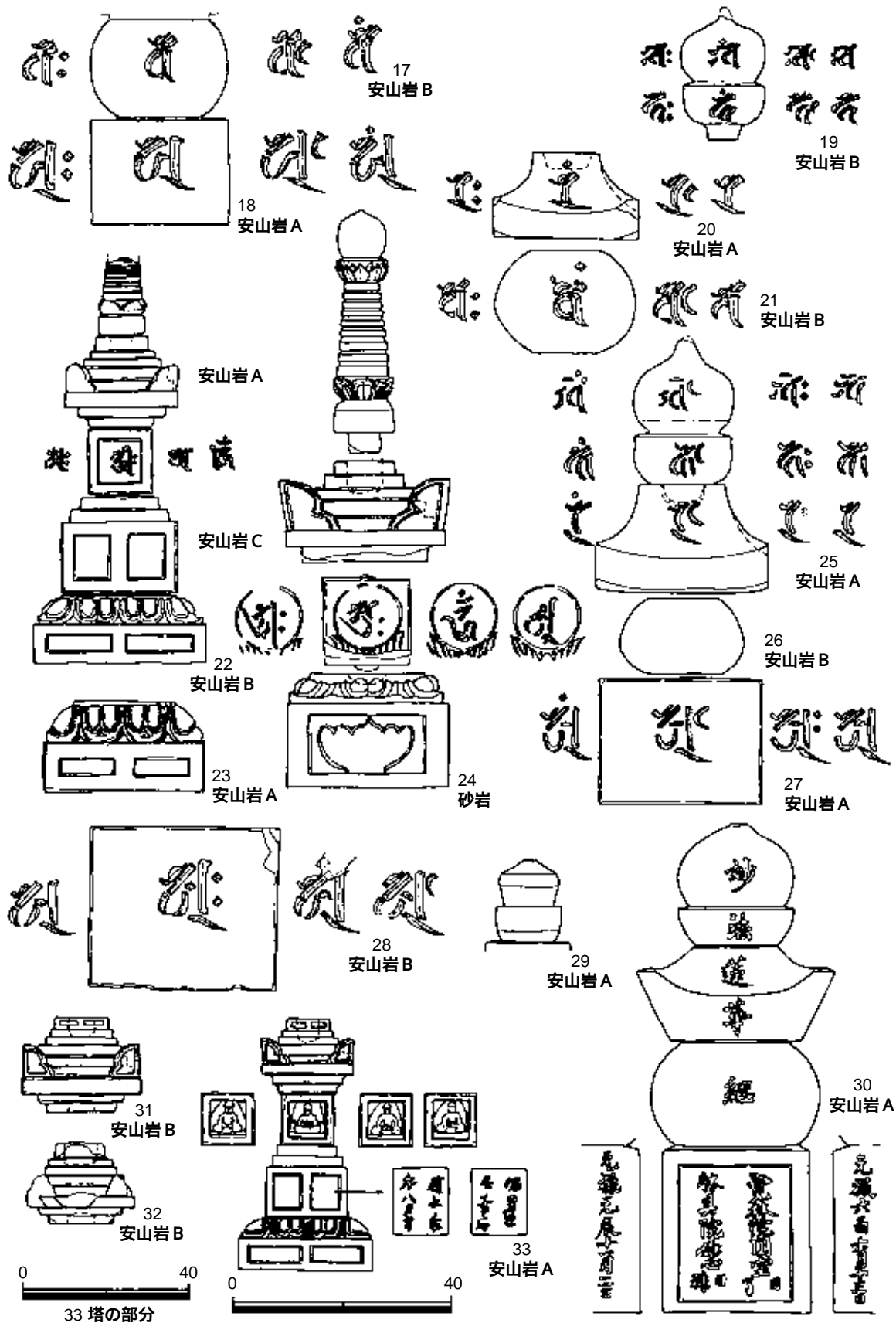
浜松荘域の都田川水系にあたる龍雲寺五輪塔は特徴的である。佐鳴湖以西以北は、先述したように密教系寺院群が卓越していた範囲で、龍雲寺は新興勢力の臨済宗である。寺伝にいう年代に合致する石塔の存在は、当地域において供養塔の造立が一宗派に偏在した事業ではなかったことを明確に示している。

西伝寺は当地域における浄土宗の嚆矢であり、開祖法然を十分に同時代の人物として認識できる時代に造営された寺院である。後代には川勾荘頭陀寺の城館に居を置いたという松下氏の帰依を得るなど、周辺有力層の寄進を得ていたことが容易に想像できる。

龍禅寺は浜松荘、とりわけその中心都市「ひくま」の一画を占めていたことは確実で、街道筋にあって門前に市をもつ真言宗の有力寺院であった。寺伝による創建年代は平安時代とされ、墓地には江戸時代のものも含め多彩な石塔が現存するが戦災にあっている。

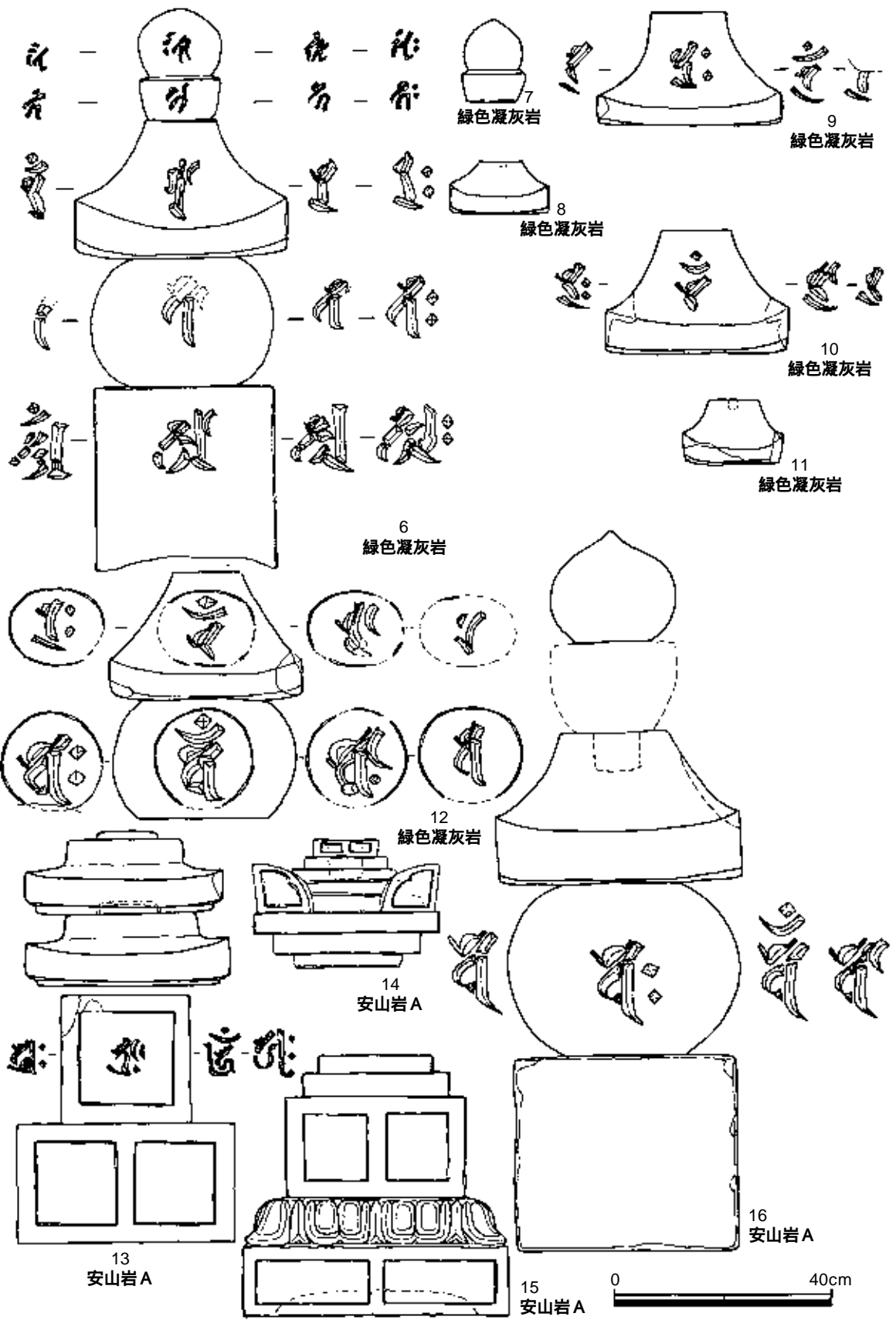
本光寺は川勾荘の中核たる頭陀寺と比べると現状では特色はないが、現在の天竜川本流の河口付近西岸に位置し、対岸に竜洋町掛塚を臨むことができる。掛塚付近は中世において外洋に面した湊として栄えていたと考えられる。寺には石塔の来歴は伝わらないものの、掛塚湊を管理していた有力者が寄進した石塔であることが推測される。

ここで冒頭の景観において概述したように、当地域の地形形成をふり返ってみてみたい。石塔造立が開始される前後の地形は、現況とは大きく異なっていたはずである。江戸時代の絵図でも大天竜と小天竜に分流していた天竜川は、この時代にも自由な流れもつ大河川として存在したはずである。また、堆積の進んでいない下流・河口域には多数の湿地・沼・潟湖が形成されていた。内湾化した河口域では河川が大きく蛇行し、現馬込川や芳川に見られるような屈曲部が生じ、河岸（内陸津）として利用されていたのであろう。浜松荘の都市「ひくま」は、当時の天竜川本流のひとつ、川幅の広がった現馬込川と中世の東海道が交差する場所に発達した。船越や早馬の地名はこの頃の名残である。龍禅寺の位置は「ひくま」南端の河川屈曲部にあたって、さらに下流にあった外洋と結ぶ湊からの物資を陸揚げさせる要衝にあったと考えられる。ここまで掲載した浜松市内の寺社のほか、荘園内の有力居館も想定される旧河川や湖沼の沿岸部に位置することが



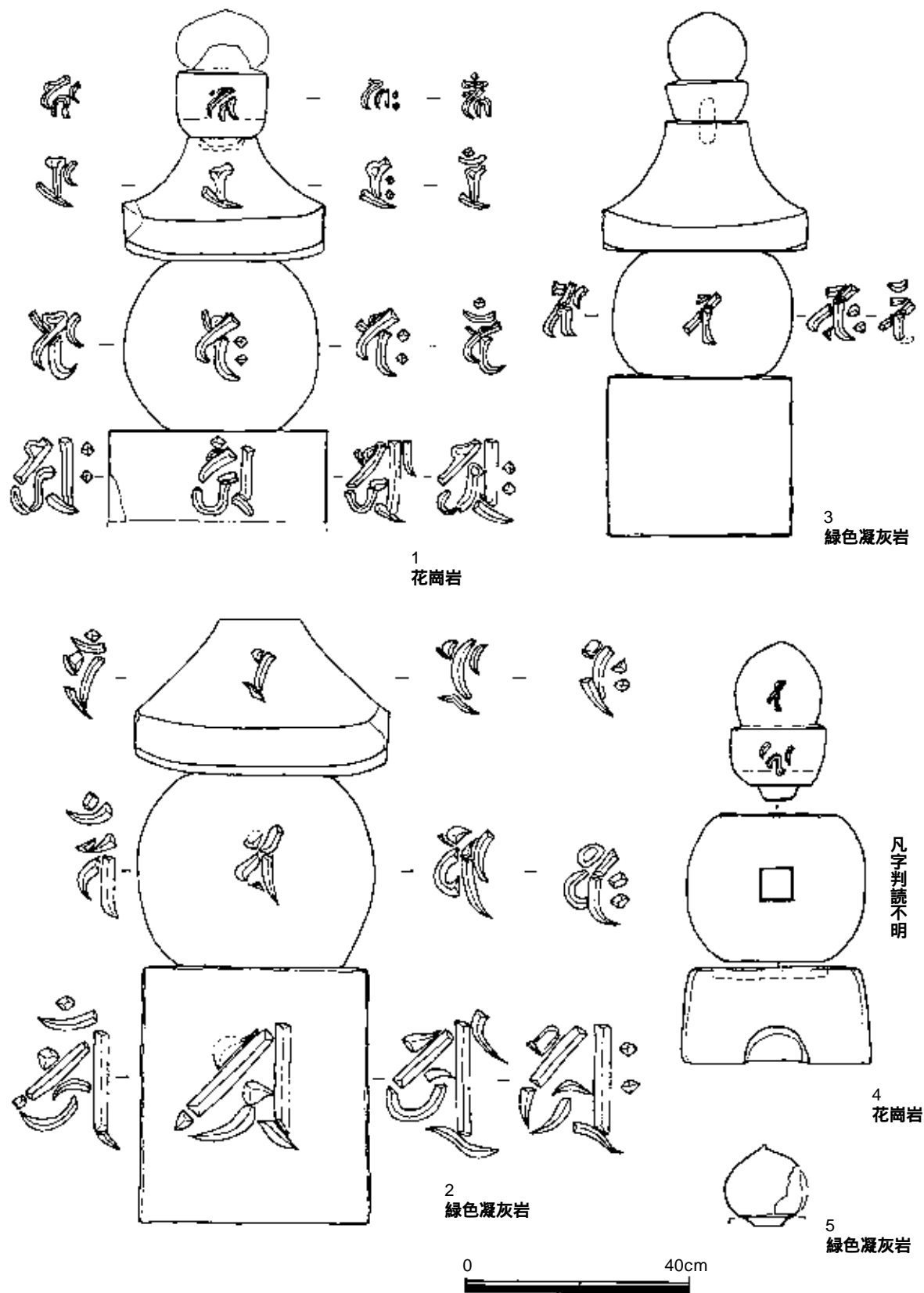
第3図 西・中遠江古式石塔実測図3

(17~21 龍禅寺 22・23 本光寺 24 かなきんさま 25~29 西伝寺法然塚 30 妙恩寺 31~33 妙法寺)



第2図 西・中遠江古式石塔実測図2

(6~8 報恩寺 9 竜守院 10~12 学園寺 13 自徳院 14 安楽寺 15 西隠寺 16 龍雲寺)



第1図 西・中遠江古式石塔実測図1 (1・2 岩水寺 3 大屋敷中世墓 4 安泰寺 5 西光寺)

領主と同じ名を残していた。このほか、当時の宿や津、町屋に所在したであろう寺社や、領主の寄進を受けた寺社にも注目しておく必要がある。

(2) 石塔の説明

この地域の古い石塔のうち、浜北市域に現存するものについてはすでに『浜北市史』原始・古代・中世編に集成されている(松井・木村 2004)。特徴的なのは岩水寺とその周辺に点在する花崗岩と緑色凝灰岩の石材による石塔の一群である。岩水寺境内の五輪塔1は、地域内でとくに古い石塔の可能性がある。花崗岩製五輪塔の部材4が安泰寺墓地にも見られるので、岩水寺の宗教圏内と捉えることができる石塔である。緑色凝灰岩製五輪塔については学園寺(覚園寺)の10~12まで見られるが、それ以南では花崗岩と緑色凝灰岩の石材は認められない。学園寺付近に荘園が成立していたかどうかは不明で、これらの石材を使用した石塔の導入には、産地からの流通を含め岩水寺の関与を候補としてあげておきたい。

美園御厨の領域と考えられる地域から以南には、安山岩製の石塔が際立つ。このうち、美園御厨にあたる自徳院には、遠江唯一の多層塔の13が部分的ながら残存するし、14・15の寺島地区の安山岩製大型宝篋印塔も注目される資料である。浜松荘域にあたる入野町龍雲寺には浜松市最大の安山岩製五輪塔の16が造立されている。14世紀代の石塔と考えられ、南朝に関わる皇子の墓塔と伝えられていることと年代的には矛盾しない。この石塔については『浜松市博物館報』14号にも実測図を掲載した(鳥居正俊 2001)。現状では地輪が横置きされている状態であるが、本来の姿に戻して実測図に掲載している。ほかの浜松市域の安山岩製五輪塔については、このほか部材ながら浜松荘域の龍禅寺の17~21と、蒲御厨域と推定される西伝寺法然塚の25~29の石塔が見られた。現在はいずれも別個体と重ね合わされている部材のまま安置されている。法然塚は西伝寺の宗派である浄土宗の開祖を祀る塚で、もともと同寺の周辺にあったのは確実であるが現位置に移動しているという。さらに、その他の石塔も寄せられてきたもので数種類の石塔の部材が混在している。なお、西伝寺墓地内にも15世紀以降の石塔の部材が多数存在し、全体的に中世石塔類の残存数が少ない浜松市域の寺院のなかでも特異な様相を示している。

安山岩製宝篋印塔については、川勾荘内の本光寺の22と23があげられる。22については同一個体ではなく、安山岩A~Cが確認できるため同サイズの宝篋印塔が最低3個体あったと思われる。23が33の反花座に類似することから14世紀末~15世紀初頭、22は小型ながら23・24に類似するため14世紀後葉に造立されたと考えられる。豊町服部神社の参道脇にある地元で「かなきんさま(金金様)」と呼ばれている祠の中に安置されている砂岩製宝篋印塔の24は、この地域唯一の関西型式の宝篋印塔である。部材ごとにわかれてはいるものの基礎が欠失しているだけで、現行高110cmを計る大型の宝篋印塔である。祠を管理している旧家によると、祠の台座部分はもともと塚で改築時に壺が出土し祠の台座内に納めてあるという。蔵骨器とも想像されるが、経塚の可能性も考えられる宗教施設が存在していたと思われる。なお、神社の名前が示すようにこの地は羽鳥荘の領域で同神社はその祭祀者であったと考えられる。石塔の形式や石材が今回の報告地域内で唯一異彩をはなつ石塔であるが、このことと羽鳥荘と関連づけることができるかは他例がないだけに現状では判断しかねる。

ほかに、天竜川町妙恩寺の安山岩製一石五輪塔の30は本論の時代を逸する江戸時代前期の石塔であるが、本地域で発見できた唯一の安山岩製一石五輪塔なのであえて掲載した。妙恩寺は日蓮宗の寺院で、蒲御厨内端和(橋羽)村と称した町屋の東端に所在する。江戸時代の絵図には塔頭4寺を門前に連ねた有力寺院であった。梵字の代わりに妙法蓮華経などが刻まれていることから、同寺で妙号などを刻んで墓碑としたことがわかる資料である。元禄元年・六年(1688・93)と戒名が読み取れる夫婦墓で、一族の墓地内で供養が続けられている。

深く刻まれた洪積世以来の渓谷と捉えることができる。この渓谷は、天竜川の堆積作用により急速に埋没したわけだが、現地表に見える天竜川と各支流が固定したのはごく最近のことで、近世以前はその治水対策の成否にかかわらず流路が変貌してきたであろうことは想像に難くない。また、旧流路跡や後背湿地の分布から、渓谷の埋没過程で湿地や湖沼が多数点在していたことは確実である。本論の時代を検討するにあたり、現況と異なる水辺の空間を想定しておく必要がある。現況では西岸と東岸を二分し行政区の境となっている天竜川本流も、もとよりこの姿ではないため、本項と次項の区分も便宜的な部分がある。

後者の浜名湖岸の世界は、広い湖水と台地に入り組んだ湾奥の小平野が点在し、前者とは一線を画する。遠江と三河との国境にあたる山腹で発掘された大知波峠廃寺をはじめ、密教系の寺院が数多く現存し、また山中に存在した伝承が残されている。浜名湖は15世紀に起こった「今切れ」によって南岸砂丘が決壊し、太平洋とつながり汽水湖に変化したという。この地形変化が経年的におこっていたとしても、淡水湖から汽水湖への漸移と、南部を中心とする陸地の減少、交通路の変化は本論の時代を検討する上で大前提となる。

浜名湖岸の地域は、前項で出現期とした石塔のまとまった事例を掌握していない。悉皆調査を経ているわけではないので確実ではないが、点数は少ないものと予想している。ただし前述したように、密教系寺院が数多く存在し他宗派の寺格の高い寺院も立地することから、今後の調査が必要な点は認識している。浜松市域では館山寺町の湖岸に15世紀後葉に造立された市域最大の宝篋印塔がある。真言宗寺院だった館山寺と内浦をはさんだ大草山、さらに瓦塔片が採集されている根本山は、対岸からつづく古代宗教ゾーンであった。

本項では前者の天竜川下流の平野部右岸に限って言及する点をご容赦願いたい。天竜川右岸で目立つ宗教的空間はまず岩水寺周辺である。この平野の北端に位置し、山塊を背後に寺域を展開している。岩水寺の現宗派は真言宗、寺伝にいう創建年代は8世紀代であるが、確実な創建年代がどこまで遡るものかの確証はない。この山腹と三方原台地の東縁、磐田原台地の西縁には千基を越す古墳群が築造されている。また、岩水寺の北東には勝栗山・泉中世墳墓群があり蔵骨器などが採集されている。古代以来の墓域という意識の継承と寺院の造営と新たな造墓域の形成とを関連づけて考えたい地域である。浜北市域には岩水寺のほか古い創建年代を伝える寺院は見られないが、岩水寺の塔頭の展開は十分に考えられるところで、さらに市域南部でも密教系寺院からの改宗年代を伝える寺院があると思われる。

浜松市域では、浜名湖岸の山岳密教系寺院と対比するように、古代東海道筋に密教系寺院が里の寺として点在する。また、中世には町屋を中心に新仏教が教線を展開している。浜北市南部から浜松市域には、古代末～中世にかけての多数の荘園が成立した。美園御厨や蒲御厨などの伊勢神宮の荘園が多いのも特色である。浜松荘や池田荘、川勾荘などは、当時の文書に残された地名と現存する地区名、地区界を対照することで、おおよその荘域を再現することが可能である。池田荘は浜松市東部から天竜川対岸の現磐田郡豊田町・竜洋町・磐田市西南部を含む広大な荘園で、立荘時の領主であった京都府松尾大社に残る「立券状写」によって坪付や作付の内容が判明している。この荘園の範囲が従前の条里制を踏襲しており、境界を接する荘園や御厨の名称も表現されているので、この地域の荘園の境界がそれぞれ条里にのっとった直線界であったことが推定できる。また、立券状には天竜川が池田荘の東限と記されているので、12世紀の天竜川本流が現況よりもかなり東寄りだったことがわかる。後世の河道変化で、池田荘と下流の川勾荘は荘園の中枢部を分断されているのである。

これらの荘園の中には、祭祀の中核になった寺社が明らかなものがある。川勾荘の現地荘官だった頭陀寺はその例である。頭陀寺に近い四十六所明神の祭祀圏は、川勾荘域とよく重なっている。同様に蒲御厨における蒲神明宮、池田荘における松尾大明神も祭祀圏の追跡が容易で荘園

遠江西・中部地域の中世石塔の出現と展開

- 静岡県下における中世石塔の研究 1 -

松井一明 太田好治 木村弘之

1. はじめに

遠江地域においても無数の中世石塔が存在しているものの、近年菊川町や浜北市域のように悉皆調査がなされた報告（桃崎祐輔 2000、松井・木村 2004）や本間岳人氏が取り上げた遠江地域の宝篋印塔研究のほか、磐田市一の谷中世墳墓群の発掘調査に関わった加藤恵子氏が報告書で石塔の分析をし、静岡県考古学会の中世墓シンポジウムにて遠江地域の中世石塔の体系的な研究発表をしたが文章化されることはなかった（加藤恵子 1993・1997）。

このように中世石塔は墓制から見た中世史を語るうえで貴重な歴史（考古）資料であるにもかかわらず、近年刊行された静岡県史でも取り上げられることはなく伊豆地域を除き実態は不明なうえ、研究報告や論文も低調であると言わざるを得ない現状である。そこでこれらの状況を少しでも打開するために、遠江中世石塔研究会を組織し遠江西・中部地域に分布する石塔の資料化を計る作業を平成15年から継続的に行ってきた。本稿では所謂伊豆石と呼ばれる伊豆・箱根産安山岩製石塔、当目石と称される焼津産緑色凝灰岩製石塔、近畿か美濃からもたらされたと考えられる花崗岩製石塔などの遠距離地の石材で造られている初現期の石塔を紹介し、その造立された歴史的背景を模索したい。さらに、初現期の石塔を模倣したと見られる問題となりそうな初期の砂岩製石塔の一部や、伊豆石の中に江戸時代初期の一石五輪塔についても論題からは外れるが、中世石塔の終末と伊豆石の墓塔の流通を知るうえで参考となる資料であることから今回あえて掲載した。

石塔の資料化にあたっては、一部の石塔は既に発表されているものは現地で更なるデータを加筆し再トレースしたが、ほとんどの石塔は今回の調査で実測作業を行い資料化したものである。また未発表の石塔の実測に関しては、執筆者の松井、太田、木村の3名のほかに石塔研究会のメンバーである溝口彰啓氏（静岡県教育委員会）も参加している。石材に関しては執筆者らの肉眼による識別であるため、細かな岩石名を明らかにすることはできないが、安山岩に関しては3種類に分類することが可能であった。すなわち、安山岩A = 黒灰色で白斑の結晶を含むもの、安山岩B = 黒灰色で白斑と黒斑の結晶を含むもの、安山岩C = 小豆色で白斑と黒斑の結晶を含むものである。焼津市当目山産と考えられる所謂当目石は、桃崎氏によると緑色変岩と分類されたが、今回の報告では一般的な岩石名である緑色凝灰岩に名称を統一した。執筆に関しては3名で各地区で分担し、各項の文末に文責を示したが、考察の項目に関しては松井、太田、木村の3名が協議して松井が文章化した。

（松井）

2. 浜北・浜松市域

（1）石塔造立の歴史的景観

天竜川下流域右岸（西岸）の平野部分は、おおまかに天竜川およびその支流の水系と浜名湖を含む都田川水系に分かれる。このうち前者は、現行の行政区画でいう浜北市と浜松市東部、後者は湖西市や引佐郡3町、浜名郡3町、浜松市の西・北部にあたる。

前者の天竜川沿いの沖積平野と河岸段丘を中心とする世界は、三方原台地と磐田原台地の間に

静岡県博物館協会 研究紀要投稿規定

1. 投稿を受け付ける原稿は次のものです。

各加盟館園職員が日ごろ従事している職務（展示・調査研究・保存・教育普及・その他）に関する

論文

報告

事例紹介

専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

上記の日本語原稿を、下記の仕様に則り、提出して下さい。ワープロの場合は、フロッピーと印字原稿の二者共に提出して下さい。

万一の事故に備え、提出の際は必ず手元に控えを残しておいて下さい。

2. 原稿の目安は次のとおりです。

論文等 本文＋注 400字詰換算 20～80枚

事例紹介等 本文＋注 400字詰換算 10～20枚

文字原稿（印字原稿は次の書式でご提出下さい）

字数（1ページ） A4版 40字×30行

写真原稿（1ページの版面は縦200×横135mm）

カラー（巻頭図版） 掲載希望があればご相談下さい。

モノクロ すべて挿図として扱います。

1. カラー原稿には、図版目次用のデータを明記して下さい。
2. 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。
3. 挿図原稿のコピーに、その掲載希望範囲を赤線で示して下さい。
4. レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
5. 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

3. 写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、原則として執筆者に行なっていただきます。

4. 原稿は、郵便もしくは宅配便で、下記宛お送り下さい。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2 静岡県立美術館内 静岡県博物館協会事務局

TEL：054-263-5857 FAX：054-263-5742

原稿には、氏名・自宅住所及び所属機関所在地（それぞれ〒・TEL・FAX番号）・部署・役職を明記して下さい。

5. 執筆者には、30部を贈呈いたします。

平成十七年度研究紀要（第29号）の原稿を募集します。

寄稿希望の方は、協会事務局（静岡県立美術館学芸課・TEL054-263-5857）へご連絡ください。
ご寄稿お待ちしております。

- 1、申込締切 平成十七年十一月末
- 2、原稿締切 平成十八年一月末
- 3、発行予定 平成十八年三月末

静岡県博物館協会 研究紀要 第28号

平成十七年三月三十一日発行

編集発行 静岡県博物館協会

発行所 静岡県博物館協会

〒422-1802

静岡市谷田53-2

静岡県立美術館内

電話 五四―二六三―五八五七

FAX 五四―二六三―五七四二

印刷所 東洋印刷株式会社 静岡支社

住所 静岡市下島一―四番地 蔵敷ビル

電話 五四―三三八―五五

FAX 五四―三三六―五